

---

# 魅羽弩（ミンド）達の物語\_story of prologue.

砂月-SATSUKI-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魅羽<sup>ミンド</sup>弩達<sup>ノ</sup>の物語 | story of prologue .

### 【Nコード】

N9215I

### 【作者名】

砂月 - SATSUKI -

### 【あらすじ】

ある日、天使の美歌は少しレズの同じく天使のマリアと一緒に日々を暮らしていたが、許されぬ失敗で天使をクビ(?) & 中学二年になって、真相を追うことに……？

しかし、その物語自体はある日突然引きこもりの私に現れた本で……？

果たして、誰によって、何のために出てきたのか

この物語は私達の運命が動き始めるただのプロローグに過ぎない。

魅羽警シリーズ第〇弾。

「シリアスな物語」+「天使等々ファンタジー」+「コメディなキャラクター達」+「ガールズラブGLな変態キャラ（約一名）」  
つてな感じの物語です。

只今、『全ての始まりは。』を大きく改稿しました。ご迷惑を掛けますが、ご協力お願いします。

順次、多少の改稿予定。

全ての始まり。(前書き)

初めて書いたお話です。

かなりの長編小説になりそうです。

よろしく願います。

全ての始まり。

「私は『魅羽弩』なる者、誰も私には逆らうことはできない」

意味不明な言葉。

「セレイカ」

私が返事をする。

そして、この夢の中、私がまず第一に思う事。

此処は何処！？

今は人と喋っているはず、でも目の前は真っ暗。

全く見えない。

世界はそこに存在しないのかと思わせる漆黒が私を包み込む。

黒い、何にも見えないじゃないか……！まつ、それはさておき、

第二に感じる事が問題なんだと思う。

まつ、なんで

勝手にお口が動いたの？

そう、さっきの言葉、私が望んで発した台詞では無い。

「止めてえええー！！そんな業わざをしようとするならば、私は  
何を叫んでいるんだ

これは望んでいる台詞では無い

おい、やめるのは私の口、お前だよっ！私っ！

ちなみにさっきの言葉も私の口が勝手に動いている。

支配者である私を無視して私の身体が。まるで、口だけが別人に

為ったようだ

私が注意しても私の身体はまだ私を無視し続けているようだ。

「貴方を　！」

ソプラノの叫びが響く

でも、私は望んでこの役を演じているじゃないんだ

私は心でめいっばいそう叫んだ

芝居は終わった。

軍配はどうやら私の方へ上がった様だ。途端に目の前の黒の世界が消え失せて往く……

次の瞬間　。

いきなり目の前に「セレイカ」と呼ばれた女の人の瞳がこっちにあった。

背が低く、見た感じは小学生の女の子。

「……………」  
瞳がこっちを覗き込むように見ている。

その瞳に胸が苦しくなる。

何故だろう、

何故か懐かしいのだ。

「あなたは　？」

初めて、自分の意思、自分自身で声を出せた。

ソプラノの叫びの代わりに放つアルトの呟きの私の声。

今なら思い出せる　。

その瞬間だった。

「?!」

「(さ・よ・な・ら)」

無声でそう、無機質に一言残すと、少女は後ろに背を向けた  
まるで、あの日の繰り返し

拒絶されたの、私？ 少女の代わりに、再び漆黒へと戻って  
いく世界が、応えるように二人を引き裂く、

引き裂いて行く……

跡形無く消えてしまう……

……一瞬にして目の前は、「自分の部屋」と云われる現実の  
世界に戻された。どうやら、ベッドから落っこちたらしい。

「痛っ……」

全身に少し痛みが走る。

「夢……？」

うん、夢だよ。身体も自由になったし、笑ってみた。但し、静  
けさに向けて……。

案の定、静けさのまま、冷たい空気に包まれる。

なんか違うよね

そう考えるようになったのは、何時の日からなのだろう

夢が「私の現実」で、これは「現実」ではない。

頭の中では何時も理解している。本当は、こんなこと考える  
なんて、頭がおかしいっていう事なんだと。

今、私が居る所が本当に本当の「現実」のはずなんだだと。

でも、でも。

怖い。そうよ、生憎あこがな今のこの世界は「嘘」、クラスメイト

も嘘。そうよ……唯一、夢だけが「私の現実」……この思い自身が  
『これが本当の自分よ、今の自分は違う!』

私は嘲笑う

私は嘲笑われる

黒が頭の中で波のように押し寄せる

黒が私を殺してゆく

やだ、でもトメラレナイ

私は逃げた、逃げる

目線を落とされる。

そうしていつも私は正気に戻される 筈だった、今までなら。

やっと逃げた先、そこには一冊の本。

『プロローグ』

いかにも高級そうな赤茶色の布の表紙に金色の文字で書かれてあ  
る本。

何で、こんな所に？

さっきまでこんな本は無かった

見覚えも無い。

一応、中を開き覗いてみたが、何故か横書きで書かれている。

「ケータイ小説？」

いや、違う。それにしてはやけに、表紙が高級過ぎる。もし  
かしたら、異世界へと通じる道具かも





全ての始まり。(後書き)

更新は週一回を目安にしたいと思いますが、実際はとりあえず思いついた時に書く予定です。

アドバイス、感想ありましたらお願いします

それでは引き続きお楽しみ下さいm(\_\_\_\_\_)m

## 第一話 「プロローグ」 (前書き)

ここからは天使(?) 美歌の物語になります。

前話で出てきた引きこもりの主人公については、しばらくは登場しない予定です。

## 第一話 「プロローグ」

プロローグ 憂鬱の日々

私の毎日サラリーマンのように退屈な日々。

地上に降り、人間観察。

そこで条件を満たした者、そう、例えば……長年生きて来た者、  
そうでなくとも、賢明と云われる者、人類の中で一番速く走る者、  
世界一の司会者……

ま、とにかく世界で有名かつ偉大な人を見つけ出し、その者達を  
「天霊界」に連れていくのが仕事。

「天霊界」とは、いわゆる「天国」と言われる場所。なぜそこに  
連れていかって？

死んだから連れていく訳じゃないよ。

普通の人はダメだから。

私は、今までひどい目に遭ったよ。

だから普通に死んでもまたこの世界に戻らされて同じ日々に戻る  
だけ。

「どうぞ。もし本当に自殺するなら勝手に。また同じ日々を  
過ごしていくだけよ」

茜空の下で言うてはならない言葉を刃のように男へと刺す女。

自殺直前、こんなことを言われるのだから、男は、ただ呆然と、はにわのようになっていた。

「……お前本当に　天使かつ、ちよつ待て……」  
「うるさいっ！これでも私はね、列挙とした天の使いなのよ！」

全身が怒りの紅に染められる。

今度は、男の顔面に強烈な一撃を入れようと、右手を握り、前へとそれを伸ばかけた瞬間。突如として出てきた手に因り、男の顔面ギリギリで拳は止まる。

「みか！そんなことしちゃだめでしょ！」  
男の目は更に狼狽えて行く。

「ああ、マリア」

こんなタイミングに出て来られると困惑する。

「今日も油なんか売っている場合じゃないんだから」

手を掴んだ金髪の少女　相棒は話を聞かない。

「えっ、ちよ、ちよつと待って、そういうことじゃないって」  
話を止めようとしたが。

「ああ、その人ごめんなさい、ご迷惑お掛けしました！　じゃ、そういうことで行くよ！」

そこで困惑している男に構わずに一言伝えたと、相棒は物凄い力で私を空へと引っ張っていくのである。

ええっ！ちよつ、ちよつと待ってよ……。

怒りで顔色が真っ赤の私そのまま、強制的にマリアに腕を捕まれ仕事へ連行されたのである。

「くそ、一発殴りたかったのに」

相棒に引つ張られながら、小言で呟く。

遠ざかっていく、男の呆れ顔、怒りが治まらない。

しかし、これから運命を変える事件がまさか起こるって、私達はまだ知る由も無い。

## 第二話 夕暮れの中で

「で、なんでまた人に危害を加えるのかなあ？あなたも天使でしょ」  
特殊なスニーカーで空中を走りながら、マリアが聞いてくる。

ちなみに私達を指す「天使」は背中に翼を持っていない。普通の人間が見ると、至って普通の人に見える。

その代わり、それぞれ開発した独自の方法で人間より速く移動することができる。

マリアが履いているスニーカーは空気に対する反発力を利用した物である。

常人以上の力を与えられている私はマリアのスニーカーが無くとも空中で走ることは可能だが、やはり普通の靴ではすぐ壊れてしまうため、特別仕様の革靴を履いている。

小柄で金髪にショートカット、頬がほんのり赤いマリアは人に好かれる。

「だって、現実を見せるしか方法がなかったのよ、あの男には」

それに比べると、私は長身で、長い漆黒の髪を一つに束ねているので人に好かれることは少ない。人が見ると私は冷淡な女らしい。

その証拠に、普通赤ちゃんは天使を見ると、

『天使さん、こっちきてー！』

『ママ、こっちに天使さんがいるよ！』とか言うのだが、私を見る  
と、

『ママ、こわいよ！』と泣かれたり、

『……（怖くて固まっている）』と泣くどころか、固まってしまっ  
たりと、恐れられている。

悪魔に間違えられることもあつたっけ。

つくづく、人から避けられやすい私は日々、

『天使の世界でも平等という言葉は存在しない』  
と思いきらされている。

「確かに正論だけど、天使なるもの、人には危害を加えないよ」と  
マリアが言う。

「何、その言葉。だいたいあれは、仕事じゃなくて、ボランティア  
でしたの」と言葉を返す。

それにあの男は気持ち悪いのよっ！……と大声で叫びたい、  
怒りが今でも込み上げるのは仕方ない。



私がマリア（Mariaという字を書く）と待ち合わせのため、地上に降りて来た所、その男が飛び降り自殺直前だった。

そこに駆けつけたのは、結論、面倒臭いことになるからである。

人が死ぬともちろん「魂」が出てくる。

その「魂」を「天霊界」に（正確にいうとその中の「幽界」だが、）連れていくのも天使の仕事である。もちろん、天霊界と地上は遠い距離にあるため（とはいえ脚力は常人より遙かにある、たった往復10分くらいで済むだろう）時間がかかってしまう。

だからといって、その「魂」を放置すると仕事をサボった事になり、ペナルティが課せられる。最悪の場合、人間に退化、つまり「クビ」になる。

という訳で、待ち合わせに遅れたくない私はその男を説得することにした。

案の定、男は「お前に俺の気持ちがあつてたまるか！」等々うるさい言葉を投げた。

でも仕方なく、その言葉に屋上の手すりに座りながら耳を傾け、説得して男の自殺を食い止めようとした。

あの瞬間までは。

男はついに、とにかく、様々な理由で精神的に追い詰められていたのだらう、

突如「うわあああ！！」と言い、有ろうことかつ、私を抱きしめたのだ！

男の顔が私の胸に……（確かに私はAだが、）イケメンならまだしも、あいつにはっ……！！

不快指数120%。

そして怒りは顔色を朱色に変えさせた。ついでに堪忍袋の緒が切れる。というよりは、堪忍袋が爆発した。

勿論我慢できない私は男を一回突飛ばし、遂に言ってしまったのだ。

「だから自殺するなら勝手にどうぞ。また同じ日々を過ごしていくだけよ」と。

その後、ついでに顔面を殴ろうとしたがそこでマリアがやってきて強制終了した。

ま、そこで殴っていたら、確実に「クビ」だったから本当は感謝するべきなのかもしれない。

街は夕暮れによって朱色に染められ、夕陽に私達も染められる。  
人と違い、空は決して避けることは無い。私は空が好きだ。

一瞬、その光景に違和感を感じる白い光が前方に煌めく。

## 第二話 夕暮れの中で（後書き）

次回は出来る限り来週末までに書きたいと思います。

応援よろしくお願いします。

### 第三話 天使さん、仕事の始まり。

一瞬、煌めきを放った白い光。

「……………」

白は純粹、神聖であるべきだ。

しかしその煌めきは、不自然、また、或いは不気味を感じさせるようだった。いや、直感でそう感じたただけ……多分幻覚を見ただけ。

すかさずマリアが私の言葉に反応して聞いてきた。

「何か、珍しい物でもあった？」

「いや、何か白い光が……………」

「どっ？」

「いや、もう見えないから。ただ、一瞬怪しい感じがしただけ」

「じゃあ、もういいじゃん。大体、白い光のどこが怪しいの？街にいっぱいあるし、その辺の『怪しい』光といえば、ラブホのピンク色でしょ、……………」

マリアの話は長すぎて、返す言葉がなくなる。いつも仕事中的な会話はこんな感じだ。

マリアの『出身国』はイギリスである。つまり、マリアは最後にイギリス人で、『天使』になったというわけだが、その金髪と可愛い顔立ちからこんな『奥さんの井戸端会議』並みのセリフがスムーズに出てくるギャップは想像を絶する。

最初に会った時は言葉を失ったっけ。

「そういえば、今日から、12月だよね！もしかしたらクリスマス前にふざけすぎた『魂』達がいつぱいいるかもね」

まだ続いていたのか……。

しかも、笑えない冗談入っているし……（普通の天使だったらこんなことは絶対言わない！）こいつが天使であることに疑問を感じる時が時々、いや常時感じ続けている。

慌てて私が言う。

「あっ、ここでしょ、はっかまち 白花町の商店街」

また、マリアとの話に夢中になって目的地を通り過ぎる所だ。ふう、危なかった……。

無邪気に言うマリア。

「あつ、そうそうここだったね！」

おいおい……。

人目ではまず付くことは不可能な程の猛スピードで空中を駆けていた二人はこれもまた人目に付かないように、目立たない路地裏で地上に降りる。

「よし、到着！みか、汚れ付いていないよね」

「うん、どこも汚れてない、OKだよ」

「じゃあ行こうか」

もう既に外は暗闇に包まれていたが、商店街の大通りでは、一日の仕事を終えたサラリーマンや学生達で人がにぎわっていた。

大通りの中では12月ということでジングルベルやホワイトクリスマスなどの定番のクリスマスソングが流れている。

木々にはイルミネーションが付けられ、街の灯りの中で青白く幻想的に光っている。

カップルの姿も見える。

「ねえ、私達も手つなごっ！」

カップルの姿を見てマリアが言う。

「女同士で手をつないでも意味ないでしょ」

美歌は呆れたようにマリアの顔を見る。

「だって、みか今は男っばいからいいでしょ？」

……。確かに、今日の私の格好は白いシャツと灰の袖無し  
ベストに黒のネクタイで、黒のスボンと革靴だ。（大抵私の格好は  
男の執事と同じ服装であると思えばいい。）胸も カップで、髪も  
後ろに一つ縛りしているので、確かに男っばい。

「ねえ、いいでしょ」

マリアは白いニットのワンピースに灰のリュックを背負い、ピンクの  
ニット帽を被っている。 今日はまだ一段と可愛い。胸が熱く  
なる……。って、おいっ！まさかこれは！？

「マリア、また私に媚薬使ったでしょ！？」

「あっ、バレちゃったの。今度こそイケるとおもったのになー」

また媚薬を使うなあー！！

まったく女の私に惚れ薬を使うなんて、いたずらの領域を超え  
すぎだ。呆れてくる。

結局、二人で手をつないで歩いていくことになった。

もし、媚薬が完全に効いていたら、大変なことになっていただろ  
う。色んな意味で。



それから数分後。

人混みの中で、すり抜けるように歩く少女が一人居た。

「さあ、天使さん、仕事の始まりだね」  
マリアが言った。

「ああ、そうみたいだね」

**第三話 天使さん、仕事の始まり。(後書き)**

初めて100アクセス突破しました！

皆さんありがとうございますm ( ) m

#### 第四話 仕事中。

その少女はまだ幼い顔立ちをしているように見えた。5、6歳であるう。青白い肌色だが、捜し求めるその瞳は潤った黒に周囲の街灯の光を吸い寄せている。

その様子を察した相棒は刺激しないように慎重かつ優しく話し掛ける。

「お嬢ちゃん」

「まってください、まだみつからないの」  
少女は何かを探しているようである。まあ、そんな事はよくあるが。

「大丈夫 それはお姉ちゃん達が代わりに探してあげるから、だから、一緒に帰るべき所へ戻ろうか……ね」

「で、でもやくそくしたもんっ」

「そうかあ。どういう約束したのかなあ？……」

「こりゃ、かなり面倒だなあ……一人で大丈夫か？」

私はそのやり取りの間、マリアを気にしつつ、その周囲にも何か無いかと用心深く見渡す。

天使は大きく分けて三つの身分から成り立つ。

マリヤ  
Mariaは、

「賢明な天使」ワイスエーゼ wise angelに配属する。

ワイスエーゼ wise angelの役割は街中などでパトロールを行い、「魂」を見つけたら一緒に「天霊界」、いわゆる「天国」へと連れていくことである。

ま、正確に言つと「天霊界」の中にある（と厳密に定めることは出来ないが）、「幽界」に連れていくのである。

それに対し、私は<sup>美歌</sup>「武装した天使」、

アームドエーゼ armed angelに配属している。

アームドエーゼ armed angelの役割は、本来ならば、「まだ死ぬべきでない」人間が事故で死にそうな状況を巧く処理して回避することにある。

それとついでに、パトロール中のwise angelの身を守る役目もある。

頭は賢いが身体能力は常人並、という奴も少なくない

wise angelをその強靱な身体能力で邪魔する物から守るボティガードをする。

そして、二つの上の身分に配属する「聖なる天使」セクレドエーゼ sacred angelが存在する。

sacred angelは高い知能と身体能力を合わせ持ち、

高い身分に属する。

またvirginityヴァージニティ様　この世の支配者、つまり「神」である。(と、少なくとも私達はそうして日々を過ごす)

その方の御供を務めたり、世話を務めたりもする。

まだ相棒マリアは説得という名の立ち話をしていた。

その話にも呆れてきた頃、

「キイイイイー!!!」

遠くから車のブレーキ音が聞こえる。

「!」

全速力でそこへ向かう。

ちなみにその時、誰かが私の姿を捉えていたら、きっと微笑を浮かべていた所を見ることが出来たことだろう。

天使とは思えない妖しき笑みを浮かべた人の姿が　。

見るとスピード違反の車の前に小柄な中学生位の男が飛び出した所だ。

もちろん、運転席の男の顔色は青ざめている。

「うわぁあっ!」

そつ男が言い終わる前に　。

車のボンネットに、踵落としを一撃、目の前にいる中学生男子を脇へ移動。車はその衝撃で止まる。

私には全てがスローモーションで見ることが出来た。変形して行く車、驚く少年、まだこちらにも気付かない取り巻き。

しかし、僅か一瞬の出来事だ。

「????」

運転席の男はその目を疑った。

確かに、【何か】がぶつかってきた跡はある。が、しかし、ひかれるはずの中学生男子は無事で脇にいる。

ボンネットには確かに跡が残っていた。美歌の踵落としの跡が。

「誰も私の行動は目撃してない、いや不可能か……。」

事故で人だかりの中、久しぶりの活躍に鼻歌を歌いながら、元の場所へと戻った。

僅か一瞬の出来事だ、多分、中学生男子はまだ首をかしげたまま  
なはず。

## 第四話 仕事中。(後書き)

注意点

アームドエーゼ

armed angel

セクレドエーゼ

sacred angel

とかいていますが、場合によって「」が出てくるので、気にしないで下さい。

次回からそろそろ急展開したいと思っています。



## 第五話 魅羽誓の噂（前書き）

やっと、話が展開します！

少し長いとは思いますが、読んでいただければ幸いです。

## 第五話 魅羽誓の噂

短いながらも充実した一仕事が終わわり、ついでにスキップで元の場所へ戻る。

待ちくたびれたマリアが少女と一緒に待っていた。

「何笑っているのさ！遅いよっ！急に消えて何やっていたのさ」

更に頬を紅く染めた顔でかなり睨まれたが、それでも暫くの間、気分はハイで固定されていたのであった。

「うふふ、久しぶりに体を動かす仕事きたから、張り切つてよ。うん、たのしかったな」

なかなかさっきのような仕事はたまにしかする機会がない。

しかし、一日中歩いてマリアの弁護をするよりもやっぱり、体を動かして人を助ける使命の方が、やりがいがある。

少なくとも私はそう思う。

その思いを察したのか、マリアは呆れて言う。

「確かに分かるけど、今度は一言いつてからやってよね……」

「それで、さっきあの女の子と話していたんだけど」  
マリアが続けて言う。

「どろぢやら、さっきまでは仲間と一緒に行動していたらしい」

「それで？」

その後、マリアが言った内容は以下のことである。

女の子は「いちご」と言って、「カイ」と言う14の青年や「ソラ」と言ういちごちゃんと同じくらい幼い女の子と一緒にいた。

全員「魂」の状態だからどうにかして「成仏」出来るようにこの商店街をふらついていたらしいんだけど、

ある日、いちごちゃんが二人とはぐれちゃったんだよね。

迷子になり、しばらくして、ソラとは合流したけれど、その時はカイはいなかった。

ソラがいうには、

『カイが、カイが ミンド と名乗る女の人に連れていかれちゃったの！』

と泣いて説明してくれたみたい。

「……………待って、ミンド って何？」

私はマリアの話を中断させ尋ねた。

途端、噂話の好きなおばちゃんの口調になった。

「最近、天霊界や人間界でも噂になりつつある謎の組織よ

正確には、トクミン 魅羽警 という字を書くらしい。」

「何それ、ファンタジーな冗談？嘘でしょ」

しかし、マリアは真顔になっていくばかりである。

「だからあ、最後まで聞きなさいって」

取り敢えず、その後約一時間に聞かされた内容をまとめるところになる。

・まず組織の者に話すだけで簡単に入れる。

・入っている人は老若男女問わずさらにかの一流有名人やスポーツ選手も入っているらしい。

・どうやら宗教団体らしいことをしていて、そのリーダー的存在は少女がしているらしい。

・そのリーダー的存在の少女は、いつでも白いワンピースを着て、小柄で幼く見えるが実際年齢不明で正体が誰にも掴めないらしい。

・最近、その組織に入っている者が犯罪を起こして社会問題に発展している。

・しかも、犯人は誰一人捕まえられずじまいで、警察も手が出せず途方に暮れている。

やっぱり一言で云うと、

魅羽弩 「怪しい組織」と言う所だろう。

でもそれらも人間のなす業だ、私達はただ死者の魂を連れていくだけ、何も関係ないだろう。

「ま、ここからが問題なのよ」

さあ、ここからが見せ所よ　　ってな具合に、マリアは張り切って喋り始めた。

「話戻るけど、その後、夕方までいちごちゃんとソラの二人で連れ去られたカイを探していたら、夕方突然カイが戻ってきた。

その時、彼は連れ去った彼女と一緒にだったみたいね。多分、その女はリーダー的存在の少女と同一人物だと思うわ。

二人に話しかけるカイの様子は、最初は普通だったんだけど、そのうち「ミンド に来い」みたいなことを言い出し、二人を無理矢理女の所へ連れて行こうとしたんだね。

二人はただならぬ予感がしてその場から逃げ出そうとしたけれど、ソラが捕まっちゃって結局、いちごちゃん一人で何とか今まで逃げ切れた訳」

「そうだったんだ……」

適当に相槌を打ちながら話を聞き流す。が、無意識に見た白い光のことが頭を掠める。

『あの時、その女は私を見ていたのか』

何故だろう、そんな思いが頭の中に浮かぶ。

「でもこんなケース初めてよ。まさか「魂」まで連れていかれるなんてね。」

絶対このことはヴァーギン様に伝えておかないと、後でただならぬ事が起きる、ような気がする。

とりあえず私はこの子と一緒に天霊界へ戻るわ」

「あつそう、じゃあ気を付けて」

私がそう言った後、マリアは早速、いちごちゃんを連れて天霊界へと戻った。

マリアはワイズエーゼの中でも優秀なので、そう簡単には襲われない。

私の仕事がつまらないと言つこともマリアのおかげだった。

マリアがいなくなった後、散歩がてら周囲を歩いてみた。

クリスマスソングがまた商店街の中に流れている。

曲は「きよしこの夜」だ。

寒いなあ。

もう、そう思った時には手遅れだったのだろうか。

美歌の瞳は逃さなかった。そこに【彼女】の視線がこちらに向けられていたことを。いや、違う、逃さなかったのでは無い。『逃れなかった』のである。そしてその視線は

「（まずいつ、危険過ぎる）！」

瞬間、彼女の白い瞳は頭の中の白い光となり、包まれて行く。

身体から力が抜けてゆく……。

## 第五話 魅羽誓の噂（後書き）

さて、美歌の運命はどうなるのか。

感想をいただける方、是非お待ちしております。



第六話 白い光と白い少女（前書き）

こんな作品ですが、よろしくお願いします。

## 第六話 白い光と白い少女

「……！」

瞬間、辺り一面が純白に包まれたか、と思えば、それらは次々とモノクロームに黒ずんで行った。全身が眠気に襲われる、上手く力が入らない、指一本も動かせない

何でこのタイミングに……運が悪過ぎる……！

街の景色がスローモーションのようにゆっくりと流れていく。

勿論、曲の指揮者は【彼女】。見えない指揮棒を振るっている。「きよしこの夜」もスローテンポに為らざるを得ない。

微かに、トラックのブレーキ音も聞こえる。

彼女の振る指揮は街全体を空しさに、そう、オルゴールの奏かなでがゆっくりと静まっていく時　を見事に魅せていた。勿論、私だけに。

出来ることなら、またネジを巻き直すように立ち上がりたい、が非情にも倒れた身体に美歌は力を入れることは出来ない。美歌自身もこの中では彼女のただ一人の観衆に過ぎず、演出に手を加えることなんて出来るはずが出来なかったのだから。

【彼女】は一体何物なんだ……？

その時、静まっていく時の中に、また怪しく輝く白い光。

「今呼んだのは」

気が付くと、その白い光はまたあのワンピースに変わり、いつの間にか、すぐそばに来て座り込んだその【彼女】。噂の白い少女はじつと美歌の瞳を見つめていた。

「貴方ですね」少女は演奏に来てくれた唯一の観衆に礼を言った。勿論、その中に隠された刃の冷たい輝きをちらつかせながら。

少女の肌は白く、髪やその見つめる瞳さえも透き通るように白く輝く。

「失礼ですが」

それから少女は刃の冷酷な輝きをちらつらせず頭にしまい込む、その代わり穏やかな響きを含ませた。

まるで、女神のようだ。いや、あり得ない。なんで人間が絶対的な力を持つ天使を気絶させることができるの？！

「殺しはしません、から」

貴方は誰なの……？だが、少女はその質問に答える気は更々無い。

「そこでしたら早く休んでくださいね。また後で会いましょう。と言っても多分そうなることは二度とありませんけど」

最後の言葉を冷たく言い放つ、と少女は安らかに美歌の目を手で閉じさせた。死人に対する最後の施しのように。

お願い、待って。 懇願しても今更無理だった。

その言葉を最後にフェードアウトしてゆく意識、程なく消えていった。

目を覚ますと、すぐ横には金髪のいかにも「キャリア」的なオーラを醸すセクレドエーゼの男がいた。

「御気分は？」

「ええ、もう大丈夫です」  
美歌は内心慌てる、格上であるセクレドエーゼには、敬語を使わないと行けない。

「無事で何よりです。安心しました」

そう言うと男は紳士らしく手を差し伸べて、美歌を立ち上げさせる。

「ありがとうございます。そう言えば、私が気を失っていた間、何かありましたか？」

そう言うと相手はいきなり、顔が暗くなり言葉を詰まらせた。

「いきなりで申し上げにくいのですが、」

「はい？」

「こんなことあり得ないのですが……」

許されぬ失敗をしたのです……それは、勿論私達にとって、非常な事態です。決して貴方だけ責任を負うことはありません」

「えっ？」

それを聞いた瞬間、美歌は身が凍ったような感覚がした。

そう、あれは紛れも無い現実、美歌が気絶したのは悪夢のような「現実」だった。勿論、それは天霊界にとっても同じことで、今後、私達「天使」が異常な事態に巻き込まれるプロローグの一端に過ぎないことであった。

第六話 白い光と白い少女（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます

m (——) m

次回は1月になる予定です。

第七話 ヴァーギン様の庭園で 〈前編〉 (前書き)

今回は少し長いので、前後編に分けました。

今回もこんな作品ですが、よろしくお願いします

m (——) m

## 第七話 ヴァーギン様の庭園で 〈前編〉

「私が気を失っている間に……」

「そうです。ともあれ貴方はまずヴァーギン様の所へ行かなければなりません。」

そこで、貴方が気を失っていた間に起こった事も聞くことが出来ましょう」

そして、私と金髪青い目であるセクレドエーゼの男 ちなみに男の名前はGreg<sup>グレッグ</sup>で、イギリス人の執事姿でヴァーギン様の世話役を務めている、 の二人はヴァーギン様の庭園へ行くことになった。

グレッグが急かすように言う。

「さあヴァーギン様の所へ、早めに行った方が良いですから」

この世の『支配者』であるヴァーギン様は《Virgini<sup>ty</sup>》と書く。

訳は「処女、純潔」。

ヴァーギン様はまさにそういうお方だった。

まだ、天使になったばかりの頃に、一度だけお目にかかったことがあった。



今はその事について思い出している場合ではない。

まさか、よりによって今回の件で、再びお目にかかるなんて

……

ヴァーギン様のいる『庭園』、つまり天霊界の上に存在する神界しんかいへと向かう。

星が輝く夜空を蹴りながら二人は走っていった。

やがて、夜空の天霊界へたどり着いた。が、まだ神界までの道は遠い。

走りながら、グレッグが尋ねる。

「身体の方は大事ですか？」

「はい、まだ平気です」

しかし、走り始めてまだ十分程しか走っていないはずなのに罪の意識からか、身体の芯が鉄のように冷えている。

「では行きましょう。時間がないので」

グレッグという奴はそんな私の心を見透かしたのか、慌てながら言った。

さっきたどり着いたばかりの天霊界も走り続けて数分経つと人影や建物が小さく見えた。

その景色は夜の東京と同じで、数限りない建物の明かりがきらめいている。

「待って、みかつ！……」

その中に私を追いかけるマリアの姿があった。

元々赤い頬を、更に紅くして、必死にこっちに向かって叫んでいる。

「マリア。ごめん……」

本当は今すぐ逢いたいが、今はそういう場合ではない。

マリアに背を向けて、前を走り続けるグレッグの後を追った。

しばらくすると、辺り一面は黒一色になった。

つまり、ここから先は神界となる合図だ。

Sacred セクレドキーゼ angle にならないと決してここから先に進むことが不可能になる。

マリアの姿ももう居ない。

もし、グレッグがいなければ、前も後ろも分からなくなりそうだ。

そんな黒一色の空間を何時間も走り続けていた時、

「もうすぐで庭園に着きますよ」  
とグレッグが告げた。

グレッグが言った途端、景色は一瞬にして黒から白い薔薇の花畑へと変わった。

その中に、美しき乙女が一人、真ん中でこちらを待っていたかのように振り向いている。

「お待たせ致しました、ヴァーギン様」

『ご苦労様、Gregg』

そして、役目を終えたグレッグは一瞬にして去るように消えた。

白い薔薇が辺り一面に咲いている。

夜にもかかわらず、美歌はその真っ白な光景に目が眩しくなる。

庭園には、私とヴァーギン様の二人しかいない。

ヴァーギン様の姿はいつでも、相手の姿形とそっくりで表れる。なので今の姿は、漆黒の髪を後ろに一つ縛りにした執事姿の私だった。

本当の姿は、その世話役をするセクレドエーゼ以外には、滅多に出さない。いや、もしかしたら、世話役でさえも見たことは無いのかもしれない。

その様子はまるで、鏡の自分と話しているようだ。

『さて、美歌。まずは疲れたでしょう、さあこちらへ』

そんなヴァーギン様の第一声に美歌は戸惑った。

「失礼します、ヴァーギン様」

『そんな硬くしなくてもいいのよ、さあおいで』

そしてヴァーギン様はこちらに近づき、こちらに来ようとした、

。その時。

『あっ、「コンツッ!」「!』

途中で何かにつまづいたのか、危うく転けそうになった。

「危ない!」「ガッッ!」「」 思わず美歌は、ヴァーギン様を守ろうと抱く。

「あっ」

お陰で、美歌とヴァーギン様の距離がグッと近付いた。思わず互いに瞳を見つめてしまった。

『……クスッ。ごめんなさい。』

「（／／／）！」

「ごめんなさい！ゆっ、許して下さいー！」

美歌は内心、怖くなった。

まさか、この状況で危つくヴァーギン様とKissする所になるなんて！

もう、何ていうことだ！

まだ、マリアのあの《媚薬》の効果が残っているのだろうか……

ヴァーギン様は微笑んでいた、が、お陰様で美歌の身体は林檎のように真っ赤に火照ってしまった。

「（／／／）……。」

それから後しばらくの間無言が続いた。やっと、ヴァーギン様が気を取り直して言った。

『さて、本題に入りましょう』

第七話 ヴァーギン様の庭園で 〈前編〉 (後書き)

少し、ガールズラブな感じになりました。

ごめんね美歌ちゃん、ネタ切れでガールズラブ疑惑なシーンを書いた作者をどうか許して下さい

( ; )

最後まで読んでいただきありがとうございました。

m ( ) m

第八話 ヴァーギン様の庭園で 〈後編〉 (前書き)

今回もこんな作品ですが、どうかよろしくお願いします

m (——) m



## 第八話 ヴァーギン様の庭園で 〈後編〉

『まずは、座る所が必要ですね』

そう言つと、もう既に目の前に茶色いベンチが、公園にあるような木製である。あつた、ではなくそれは一瞬にして出したのである

『さあ、ここに座つて話をしましょう』

目の前には白い薔薇達が、良い香りと共にそよ風に揺らめきながら一面に白い波を作っている

その中で、自分と同じ姿のヴァーギン様と話をする景色はまるで夢を見ているようだった。

しかし、今回の件では、犯した失態についての話であり、それは現実だということ、そして自分が責任を負うことを覚悟していた。

『今から、貴方に見せるイメージは貴方が氣を失っている間に起きた出来事です』

ヴァーギン様はいつでも、世界各地を「見る」ことが出来る。

たとえそれが「過去」や、また「未来」だったとしてもこの世の支配者には、容易いことである。

但し、それを見たとしても直接手を出したり「未来」については一言たりとも言つたことは無い、と云うよりは言つたことを封じているような気がする。

『さあ、瞳を閉じて』

美歌は瞳を閉じ、瞼の裏の世界を見る。

うつ伏せに倒れ込んでいる私とその横に座り込んで話しかけるあの白いワンピースの少女の姿が見える。

情けない姿である。

そして、悲劇は起こった。

私が倒れた場所のその先すぐの所、広い車道で一人の女子中学生が金縛りに遭ったかのように座り込んでいる。

そこに2台トラックが凄まじいスピードで突っ込んで来る。

「キキイイイー！」

商店街にブレーキ音が鳴り響く

その瞬間、反対車線から、一人の影がトラックに飛び込んだ。

「ドンッ」

そう、トラックに轢かれたのは飛び込んできた影の方だった。

しばらくして、救急車がやって来るとすぐに運び込まれる。

奇跡的に助かった女子中学生も乗り込んだ。そして、何故かあの白い少女も一緒に。

もしも、そこに美歌が駆け付けなければ間違いなく二人共、助かったこととなっただろう

しかしその時美歌は気を失っていた。

いや、あの白い少女によって気を失ったのである……

映像が流れている間何故だろう感情も何も無しで冷静に見ていた私がそこにいた。

『私も今回の件については100%貴方に問題があった訳ではないと思います。』

普通貴方のような *armed angel* アームドエンゼ は普通の人間では、太刀打ち出来ないはず。

多分、あの白い少女は……。

……んっ、とにかく、いずれにしても全てが分かる時が来るはず  
です。……、それに、私の能力を使った所で『未来』はすぐ変わる  
もの。意味は無いのです。

それと事故に遭った二人の少女は一命を取り留めましたが、……  
まあ、そこにいる者と後で事情を聞けば分かるでしょう』

「そこにいる？」

次の瞬間、目の前に突然、居なかったはずのマリアが姿を現す。

「ヴァーギン様、真に失礼しました！あ、あの……その美歌のことが心配で……」

マリアは今にも泣きそうな顔をして言った。

『別に良いのよ、Maria。』

それに本当は美歌と一緒に罰を受けたかったのが狙いですね』

「……！は、はい。本当にごめんなさい！」

突然のことと言葉が出て来ない何故ここにマリアが？

『それは勿論貴方のためですよ』  
ヴァーギン様が優しくマリアの気持ちを代弁した。

勿論、いつものストーカー行為な動機はありがた迷惑である、でも何故だろう、感情が溢れてくる。

『では一応罰を受け入れますか？でも、今回は罰なんて云えない程の異常なパターンなんですが……一応受け入れるとして貴方は人間に戻ってもらいますが、同時に、少女達の警護を女子中学生の一人

として命令します。まあそれ位あった方が、やりがいはあるでしょう。罰と云うよりは頭を冷やす感じで、詳しいことはGreaseに聞いて下さい』

「ありがとうございます！」

こうして、美歌は人間になる罰は受けたものの、クビは免れたのだった……

第八話 ヴァーギン様の庭園で 〈後編〉 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました

m (——) m

お気に入り登録して下さい、ありがとうございます！

来年も頑張って更新続けたいと思います。

ではよいお年を！

## 第九話 天使として一応最後の日（前書き）

美歌・マリア「あけましておめでとございます!」

美歌「今年も私達をよろしくお願いします!」

マリア「そして、私と美歌の関係も…」

美歌「新年早々、そんなこというか!」

回し蹴り一撃

マリア「ギャンっ」

美歌「今度言ったら、半殺しにしてやる

ってことで引き続きお楽しみ下さい!」

## 第九話 天使として一応最後の日

「クビ」という名の最悪の事態は免れた。

『Maria、  
マリア』

まだ貴方は私に伝えて置きたいことがあったのでは？』

「は、はい！」

まだ、私の姿のままにいるヴァーギン様とマリアの二人は向こう  
に行ってしまった。

そして。

「美歌さん、これからお話しすることは貴方にとつてとても重要な  
ことなので、注意して聞いて下さいね」

私は今、グレッグに注意深く、今後の生活についての話を聞かさ  
れている所だ。

覚悟はしていた。

でも、グレッグの話の長さには予想外だ……

さつきから今までの合計、最低でも一時間位ノンストップで話し  
続けている。ヴァーギン様と話をした時間を1とする。と、最低  
10は確実に超えるだろう……と呆れる位長すぎ  
月一回の集会の校長の話の長さに匹敵するぐらいただ長い。そし  
て何度も同じ話を繰り返ししていた。

機関銃をノンストップで連撃のように話し続けるマリアと会話し  
「持久力」を日頃鍛えていた私は熟睡することは無いものの、ちょ  
つとこれは。



「とりあえずまとめますと、」

やっと話のまとめに入ったか……。

「美歌さん、本当に話聞いてますか？……」

私の怠い心を読んだのだろう、グレッグが殺気漂う目付きで聞いてきた。

もう、今からでも殺しましょうか、と言いたそうである。

「は、はい！」

誠に恐るべし、セクレドエーゼの能力……

「じゃあ、続けますよ……」

グレッグはさっきまでの冷酷な目を一変させると、再び、優しい瞳で話し始める。

「貴方は罰として、一旦アームドエーゼの能力を禁止させていただきます。

そして、あの事件の被害者達が通学しているはっかちゅうがっこう白花中学校に転校生として潜入し、しばらくその被害者の警護及び観察をしてもらいます。

期間は明日の朝から被害者の安全が保証される日までやってもらいます。

一応非常時にはアームドエーゼの能力が使えるようにこれを付けておきます」

そういうと、グレッグは小さな天使の人形を出した。

「ヨロシク」

人形は嬉しそうに私の肩に飛び乗る。

金髪に白衣、小さな羽根をパタパタと動かしている。

……意外と可愛い。

グレッグって意外と可愛いモノ好きなのかもしれない……。

それが凶星だったのか、グレッグは慌てて言う。

「わ、私は貴方のためにそれにしたんですよ……」

人形は私の魔法によって動いています。普通の人には、見えないようにしています。緊急時には、人形が解除の合図を送ります。

もし、緊急時以外の時に強引に能力を発動しようとする人形が警報を鳴らします。それでも無理に発動した場合、「次」は無いと肝に命じておいて下さい」

「はい」

「では、明日の朝から始まるので、今のうちに持っていく荷物をまとめておいて下さい。しばらくは自宅にも戻れないでしょうから」

「分かりました」

「では、天霊界までお迎え致します」

後ろを振り向くと、マリアが待っていた。

「遅かったね。やけにグレッグさんの話が長そうだったけど？」

おいつ、人のことを言える立場なのかお前は……！  
っていうか、

「マリア、今の状況分かかっていて言っている？」

「えっ？」

後ろには殺気を発しているグレッグの姿があった。

普通、天使として最後の日ってこんな感じなのだろうか……  
美歌は呆れてしまった……

第九話 天使として一応最後の日（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

今年もよろしくお願いします！

m ( ) ( ) m B Y 砂月

第十話 人間になる前夜に〈前編〉（前書き）

今回も少し長いので前後編に分けました。

こんな感じですが、よろしく願います。

## 第十話 人間になる前夜に〈前編〉

ヴァーギン様へと別れの挨拶を済ませ、薔薇の香りが漂う神界を後にした。

そして、今。私達はグレッグを先頭にし、天霊界へと戻っている最中である。

周りはまだ漆黒に包まれている

「おい、貴様。何故に隠れてこの私に一言も言わず後をつけてきたのだ？」

「すみません、どうしても美歌が心配で……」

「ふざけるな。こここの付近一帯はセクレドエーゼ以外の者には危険過ぎる場所である。ヴァーギン様のご加護を受けていようがいまいが関係無く、足場を自分で作らなければいけないし、体力、精神もかなり消費するのだぞ。もしも一歩間違えて踏み外せば二度と戻って来れないことになる」

「はい、それは覚悟しております……」 「はいじゃないだろう。まずは謝れ」

「ごめんなさい……」

グレッグが鬼の形相でマリアを睨み付けながら、冷淡に話しかけている。

藍色の瞳が氷のように見える。

それに対し、マリアの顔は青ざめて、怯えているように見えた。青い目には恐怖の色を浮かべている。

マリアはグレッグに注意、いや、必要以上にしつこく叱られている最中である。

無理もない。セクレドエーゼに言わず、勝手に私達の後を付いてきたのだから。と言うより、本人がいる前で「話が長い」と発言、

100%確実に、グレッグのようなタイプにとっては絶対禁句とされる言葉だろう。したものであるから、ますますグレッグの殺気を強める結果になった。

「とにかく、ここまで無事だったことにヴァーギン様に感謝することだな」

グレッグのその一言で、場は静まり帰った。

シラケた。が、その方が良かった。もし、グレッグが怒り狂ってマリアに攻撃してきたら……

私は、そのハイレベルな闘いに絶対巻き込まれて命の危機にさらされていることだろう。

まもなくして、天霊界が遠くが見えてきた。まだ真夜中である。月が輝き、その周りには沢山の星々が見えていた。暗闇に慣れた目には少し眩しい

まだ、前方のグレッグとマリアは一言も発してなく、黙々と走っていた。

「……」  
「……」

二人の金髪が夜空の光を受け、冷たく輝いていた。

程なくして、私の自宅の前に着いた。

「到着致しました」

さすが、セクレドエーゼ。本人が何も言わなくてもちゃんとたどり着けるなんて……

あまりにも、正確に目的地まで行けたので、逆にストーカーかと恐ろしい位である。

「では、明日8時に白花中学校正門前にてお待ちしております」  
グレッグはそう言うの間もなく姿を消した。

自宅である。共同生活用に作られた少し大きい家。

ここに帰るのはおよそ1年ぶりである。

最近まで世界各国中をマリアと二人でパトロールしていたため、どっちみち今日ここに帰る予定だった。家の前には、私とマリアの二人だけになった。

「じゃあ私も一回自分の家に戻るね」

そう言うとマリアも姿を消していった。

家の前には私一人しかいなかった。

夜風が胸に染みんだ。

「今日で終わり……」

と言うだけでは無い。夜空には月が潤って輝いている。



第十話 人間になる前夜に〈前編〉（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

お陰様でPVが1000回超えました！

ここまで読んで頂いた方々ありがとうございます。

m ( ) m

そして、これからもよろしくお願いします

第十一話 人間になる前夜にへ中編 (前書き)

すみません。

あまりにも長いので、三回に分けて書くことになりました。

今回も新キャラが出ます。

どうかよろしくお願いします。

m (——) m

## 第十一話 人間になる前夜に〈中編〉

疑問と憤りと悲しみ、色んな感情が汚く混ざり合わされた絵の具のように頭を染め上げてゆく。

本当に訳が分からない。いや、何でこんな一日になったんだろう……。白い月をいくら見つめた所で答えが出て来るはずなんて、

無いのだけれども。 今日一日の様子を思い出してみる。……ミンド？そういえば、「魅羽弩」の噂を聞いてからまだ時間が経たない内に白い少女を見て気絶したんだ。そしてその間に関係の無い二人が巻き込まれた。噂からしても、魅羽弩は胡散臭い。だが、実際その通り魅羽弩に邪魔されたから私は失敗を犯したとされている

訳が分からない

実際、世界は人間界の上に存在する天霊界、そしてその上に神界があることで成り立ち、人間達は「動物」として進化してゆくことに過ぎない。天使は、人間が進化した結果である。だから、神界にいるヴァーギン様以外には無敵のはずなのだ。

なのに、ヴァーギン様を始め、マリアや皆は人間が形成した組織に過ぎない魅羽弩を敵視しているような対応をしていた。いや寧ろ恐れている？じゃなければ一方的に今回は仕方がないなんて対応あり得ない。

実は、ヴァーギン様との話では殆んど一方的に話が進められた。ヴァーギン様が結論を出した時、私は反抗しようとした、が、そこにマリアが変に入ってきて有無を言わず了解して話の決着が着けられたのだ。そこには、あの二人の都合は含まれていないような気がする。そう、まるで生贄のような扱い だからこそ、一層潤っ

て輝く月が美しく見えるんだ。

そんな月だけが理解してくれる、

って、あれっ……。

「何考えているんだろ、私……」

全く、自分で何を言っているんだ。最後に「月だけが友達」という、意味不明な考えが頭を埋め尽くした

それは一瞬、刹那の事だ。が、思わず目眩がする程、おぞましい感覚が全身を駆け巡った、ような気が残る。

「まだ家に入ってなかった」

涙を拭うとまだ自分が家の中に入っていないことに気付いた。

さっきの事は、忘れよう。気を持ちなおしてドアを開ける。

家の中はルームシェアなので、広いリビングを中心に一人一人の部屋が付いていた。

「よっ、久しぶりだね！どうだった？美歌ちゃん？」

「アル八姉さんお久しぶりです。相変わらず家に居られるようで」

広い家の中ではアル八姉さんが、……また、いつも通りの格好でリビングのコタツに座っていた。

アルハ姉さんは一応ちゃんとしたエジプトのセクレドエーゼである。

本名はアルハリーフ。

エジプトの公用語であるアラビア語で「秋」という意味合いである。

小麦色の肌に、腰まである長い漆黒の闇髪、と吸い込まれそうに大きな黒い瞳。

美歌の髪も漆黒であるが、アルハ姉さんの髪は違って艶消しの黒髪で、それは光をも吸い込む漆黒の闇を連想させた。だから「闇髪」とここでは表す事にする。

美歌と同じくらいの長身で細い　いわゆるモデル体形である。

スリーサイズも完璧である。

もし、胸元が大きく空いているセクシーなドレスを着てそこら辺の男達に話し掛けたらとしよう、その大きな瞳と漆黒の髪が醸し出す魔性の魅力に一瞬で男達は惚れてしまっだすだろう。

一言にまとめると、

「現代のクレオパトラ」である。

が、しかし、要のアルハ姉さんの普段の服装は　。  
「はあ………」

一年中、上がタンクトップで下がジャージ……

季節感が無かった。

まあ、理由は一年、一日中殆ど家にいることなのだが……  
ずっと家にいる訳は、彼女の仕事の仕方にある。

アルハ姉さんはヴァーギン様に許可を正式に貰い、「人々の考えを正していく」という理由で今、一人の作家として色々な本を人間界へ送り出すことを仕事にしている。

ちなみにペンネームは「秋風 桜」。

そのまま「あきかぜ さくら」と読む。

本人によると「秋桜」という字を書くコスモスを見て決め手になったという。それはともかく、実際、人々に良い影響を及ぼしているのかは、不明である。

なぜなら本人は面倒臭がりで結局、この仕事が一番楽でやっているのだから。

「何立ち尽くしているの」

「あっ、ちよっとそれは……」

明日から天使を辞めて人間になるので、となんて言えるわけが無い。

「……そういうことが」

早くも全て読み取ってしまったのだろう、アルハ姉さんは笑いをこらえている。

全く、分かっていて、わざと笑っているのか……

「さつさと準備を済ましたらまたこっちにおいで。今日は、天使として最後の日として飲もうじゃないか」

無類の酒好きである。

その証拠に、彼女の隣にはもう空になった赤ワインの瓶が三

本、原稿と共に置いてあった。  
姉さんの頬も、ほんのりピンクに色づいていた。

「はぁ……」

二度目のため息。

今度は深い溜息を吐き、部屋へと入った。

部屋の中はベッドとクローゼットそれと机と椅子だけの殺風景な感じである。今まで肩の上に乗っていたエン さっき、グレッグから渡された可愛い天使の人形が部屋の中を飛び回っている。せつかくなので「エン」と名付けてみた。

「~~~~~」

エンは気持ち良さそうにのんびりハミングしながら、上で飛んでいる。

思わず、こちらまではにかんてしまいそうになるが、彼女の金髪を見て不意にマリアのことを思い出す。

あいつ、今どうしているんだろう……

いつも、媚薬を入れられたり、入れられたりして色々面倒な奴だが、同時にマリアは大切な相棒でもあった。

（因みに『入れられたり』は強調するために繰り返し言った。それに彼女は多いのだ）

今さら思うと、明日でマリアとはしばらく一緒に仕事が出来ない事態だつてあり得るのだ、少なくとも天使として本来の仕事は出来なくなる。少し寂しい。

そつという事を思いつつ、美歌は着替えを銀色のアタッシュケースへと詰め込んでいった。

第十一話 人間になる前夜にへ中編 (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

( \* ^ ^ \* )

もし何か感想やアドバイスありましたら、よろしくお願いします。

m ( ) m



第十二話 人間になる前夜に〈後編〉（前書き）

すみません、今回はいつも以上に長いです

（――；）

とりあえずここで一区切りにします。

と言つ訳でよろしく願います！

## 第十二話 人間になる前夜に〈後編〉

持っていく服や洗面用具が全て揃ったのを確認し、美歌は改めて自分の部屋を見渡した。

相変わらず、この部屋は殺風景だ、何一つ変わっていないかった。部屋は良く持ち主の性質が現れる物だ。

「エン、行くよ」

「〜」

すっかりエンはこの部屋に飽きてしまっていたらしく、呼び掛けるとすぐさま今度は頭の上に乗ってきた。

「それでは、最後の飲み会に行きますか……」

美歌は部屋を後にした。

「アル八姉さん終わりましたよ」

大概、飲み会は私とアル八姉さんの二人ですることが多い。

本当はここに住むエーゼは私とアル八姉さんと、そして ツイリユイ 翡翠

という名のアームドエーゼが住んでいるが、あいつは中国人で、しよっちゅう中国や朝鮮で活動しているので殆ど会う機会がない。

という訳で、家に戻ると二人で朝まで飲みまくるのだが……

が……

………?!

「なんでここにっ?!?!?」

「思わず自分の目を疑う。

そこには、アル八姉さん、そして、茹でタコのように真っ赤になっているマリアがいた。

「ふええ〜」

駄目だあ……もう出来上がっているよ……こいつ。

って言うか、なんでここにいるんだ！こいつはあ！

「ゴメンね！美歌ちゃん、急にねマリアさんがやってきたから、先に進めようと吞ませていたらこうなっちゃって」

言葉としては、謝っているが、アル八姉さんは笑っている。

あの……全然笑う所じゃないんですけど……。姉さんっ！？

「あの……話の内容がさっぱり、訳が分からないのですが……」

ってか、アル八姉さんもいきなりやってきたからって、酒を吞ませちゃダメですって！！

「にゃはあ〜うふふ」

完全に出来上がった赤マリアはいきなり私に抱きつこうとした。

こいつ、なんで事前に酔っ払いにならないように準備してなかったんだよ……

まずそれ以前になんで来たんですかっ！

マリア、あんたは明日で最後に見送りするんじゃないかっただけ！？とにかく意味が分からない、分からない分からない分からない！

「まっつてよう〜」

「誰が待つか！」

マリアの変態度が更に増している。まるでゾンビのように襲いかかって来た。

このままだとまずいつ！

そして、出した結論。

「彼女を眠らせよう。」

これ以外、平和に済ます方法は見当たらない。

「……エン、今日は能力を使ってもいいんだよね？」

「ハイ」

「アル八姉さん、今から数分間は避難した方がいいかと」

「別に私は構わないから大丈夫」

「そうですか……」

「……限界突破発動」

美歌は目付きを変える。

瞳の奥は、キラリと獣のように輝いている。

本気を出すと瞳が別人になるのだ。

「ふにゃ？」

マリアもさすがに不思議に感じたらしい。

まあ、いつもならここで冷静な彼女は逃げているはずだが。

「はあああつっ!」

叫び声と共に、マリアに向かって超高速で正拳突きや蹴りを入れていく。

その攻撃に遠慮や仁義等は一切入れる暇は無い。

「やああああ!」

「……おつと」

マリアもいつも私の攻撃に慣れているのか、それとも酔拳の使い手なのだが知らないが、攻撃を全てかわしていく。

が。

「ああつ!」

僅か一瞬、マリアがワインの瓶につまづき、よろめいた。

「今だ」

美歌はその瞬間を見逃さなかった。

「一撃必殺つ!」

すぐマリアの首の後ろに回り、そこに渾身の一撃で延髄切り  
首の後ろは人間の弱点 脚は入れた。

「ぎゃん!」

マリアが落ちる。場所は丁度、ソファアの真下で見事に叩き付け  
られた。

『バンツ!』

もし、私位の威力で普通の人間がこれを受けると首の骨が折れ、  
即死亡だろう。

そのまま、マリアは深い眠りに落ちる。

「……………」

「寝息こそは立ててないが、一応眠らせることは出来た。大丈夫だ。」

「彼女はまだ死んでない。」

「ああ、あ、久々に派手にしちゃって……………」

「その原因を作ったのは何処の誰ですか……………」

「元々、アルハ姉さんのせいでこうなったのに……………」

「美歌は呆れてしまった。」

「マリアは今、安らかに熟睡している。」

「理由は単純だ。」

「念には念のため、ついでで彼女に強力な睡眠薬を注射で注入して置いた。」

「勿論、作ったのは彼女自身。」

「いわゆる「目には目を 薬には薬を」と言うわけで。」

「……………ZZZ」

「マリアは安らかに天使の寝顔で寝ている。さっきの暴走があり得ない位だ。」

「まあ、可愛い寝顔……………」

「そのまま一生寝て入ればいいんですがね……………」  
「取り敢えず、明日までは起きて来ないだろう。」

「んで、彼女が伝えたかったことなんだけど、」  
「はい？」

「明日の話らしいね、ヴァーギン様からちゃんと許可を頂いて一緒に行動するらしいよ、監視役として」

その言葉に表情が一瞬凍る。

「それって、まさかマリアの事を指します？」

「もちろん、当たり前じゃない 他に誰がいるのよ」

……ええええっ！！しかも、『監視役』って何でっ！？

「ちよつと、それって本気なんですかっ！！」

「んなこと、聞かれてもこっちは心の中を覗いただけだし……」

嘘だあっ！

「嘘ですよ」「嘘ではありません。」

「何？」

目の前には何故かグレッグが。

「何でこのタイミングでいきなり登場するんですか」

「お久しぶり、グレちゃん！」

「アルハリーフさん、グレちゃんって呼ぶのはいい加減止めて下さい」

「いや、いい加減こちらの質問に答えて下さいって」

「あ、そうでした。そう言えば、学校の制服を届けるのを忘れまして」

それだけのことで登場したんですか！

「後、マリアには明日から、美歌さんの監視役として一緒に行動して貰います……っていきなり、何眠らせてるんですか」

「色々あったんです！ともかく、マリアの監視下におかれるなど……」

「じゃあ、今回の件は無かったことでクビにし「やっぱり、何でもないですっ！」」

「そうですか」

くそお！何でこんなことになるんだ！

グレッグは二人分の制服が入った包みを置くと、

「では、明日正門前で」

と言うのだった

「グレちゃん、せつかくだから一緒に呑もうよ」

「結構です」

アル八姉さんの甘い誘いに冷淡な口調で断るとそのまま一瞬で消えるように去った。

「グレちゃん行っちゃった……」

相変わらずその時の私は、マリアのことで目眩含みの頭痛で死にかけて所を覚えている。



そして、出した結論は。

「いいですよ、アルハ姉さんっ！今日は呑みましよう！」

もっぱら現実逃避である。

「ま、いつも通りでいいっか」

とにかく、物凄くイライラしていたので勢いに任せて酒を浴びるように飲み、そうして人間になる前夜は更けていった。

## 第十二話 人間になる前夜に〈後編〉（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました！

次回からは、シリーズ全体の主人公である引きこもりの少女の方に話を戻します！

ここまで、何か感想やアドバイスありましたらよろしくお願ひします  
m ( ) m

### 追記

「全ての始まり」の部分を少し書き直しました。  
ご迷惑おかけしますが、よろしくお願ひします

m ( ) m  
砂月・SATUKI・

休憩中。 (1) (前書き)

こんな作品ですが、どうぞよろしくお願いします。  
m ( ) m

休憩中。(1)

本を読み始めて30分が経過した。

只今、机の上のデジタル時計は黄緑色の背景に、

『11:30』

の黒い文字を映している。

『……………』

しかし、周りの景色どころが、部屋でも何一つ変わった様子は無かった。

いわゆる『異世界』の雰囲気も感じられる気配は無い。

ただ変わったことと言えば、私が読んだページ数、この本の物語の理解度、それと、太陽の日射しの暖かさ……………。

数え出したらキリが無いが、その中に私が今求めている『異世界』の要素が原因で変化していることは一つも無い。

読んだページ数はそりゃ、読んでいる人が『読みたい』と、例えばページ数が進んで変化するだろうし、それに伴って、物語の理解度も深まることになる。

太陽の日射しの暖かさも、私の部屋の窓が南向きになっているおかげでお昼になるにつれて暖かくなるだけだ。

春の暖かな日射しが少女のボサボサな黒髪を明るく照らしている。

しかし、少女の瞳はそれさえも拒絶してしまっぐらい、暗く冷たい。

少なくとも彼女自身は鏡を見るたびにそう思っている。

自分はそう思いながら、再び本の方に視線を落とす。

内容はいわゆる天使達が出てくるファンタジーだが、主人公がいきなり人間になったり、メルヘンチックな設定が少ないので一概にはそう言いきれない。

恋愛設定も今はない。というより完全にG、ガールズラブな設定

があるので絶対今どきのケータイ小説ではないことは確実に言い切れる。

ところが、同時にガールズラブな設定を出していることは、この本がいわゆる『異世界』への入り口である確率も極端に低いことを示すことにもなる。

『やっぱり、ここは現実でそんな異世界なんて存在していない』  
そう断言したかった。  
というよりはそう断言出来るはずだった。

が、それには問題があった。

本がどうやってほんの数分のうちで出てきたのかが分からないのである。

起きた当初はここには絶対本など無かったはずなのだ。

この部屋には元々本は置いていなかった。普段読んでいるケータイ小説はネットで読んでいて、それ以外は図書館の中で借りることはせず、速読で読んでしまう。

もしかしたら、私が起きた当初でパニックっているうちに誰かが本を置いていった可能性も考えられた。が、父は昨日から出張で居ないことになっていたし、第一、もし誰かが侵入して来たら気付いているはずなのである。

「……………」  
考えていたら、頭が痛くなってきた。

「ぐづぐづ」  
「……………」  
腹も減る。

諦めて、一旦ご飯を食べよう……………。

そう思っている矢先だった。

「貴方はこの物語の世界を知らなければならぬ。」

第三者の声の話しかけてきた。

休憩中。 (1) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました！

m ( ) m

もし感想やアドバイスありましたらよろしく願いします。



休憩中。 (2) (前書き)

今回はシリアス100%で進めます。

今回の場面はシリーズ全体でもかなり重要なキーポイントが出てきます。

どうぞよろしくお願いします

m ( ) m

休憩中。(2)

「貴方はこの物語の世界を知らなければならぬ。」

第三者の声が聞こえた。

「……えっ」  
思わず、声かしたドアの方を振り向いてしまった。

「さっきの言葉は私が喋った」  
そこには、黒の迷彩服を身に纏った一人の女が居た。

黒髪、ストレートで少しボーイッシュなショートカット

少し藍が交じる黒群青の瞳

私よりも少し幼げな顔立ちとこれもまた少し私より低い背丈

まさか。

「も、もしかしてあなたは、綾瀬……」

目の前の人物と目線が合う。

「私の名は、

アヤメ・ジヨヴァンニだ」

「嘘言わないでっ！貴方は……」

何言っているんだ私。

そこで私は冷静を取り戻した。

元々、綾瀬彩香あやせあやかはもう来ない……

アイツが来れるはずないんだ……

？

だとすれば、私が今見てる女は私の妄想か……。

『遂に幻想と幻聴か……』私はついに精神がイカれてしまった自分を嘲り笑いながら、部屋を後にしようとした。

「人の話を聞け　ウイング」  
そのままアヤメにしっかりと腕を掴まれた。

「……………んっ?!」

私を掴んだその手はか細く、所々に痛々しい生傷の跡があったが、そこには温かな血が通っていた。

人間の手の感触が私の腕に伝わってくる。

今、私の目の前に居るこの女は私の妄想なのに、  
なぜだろう、何故、何故にこんなにも温かさが残る。

妄想のはずなのに現実を感じている私がいる。

なんで……………。

固まっている私にアヤメが真剣な眼差しで語り掛けてくる。

「ウイング、貴方はあの本を読んでもまだ気付いていないのか。」

あの『白い少女』と貴方は前に接触したはずだ。

『白い少女』は唯一、貴方を」

「そんなこと私は知らないっ！」

「現実から目を逸ヒラらすな！」

「そんなこと言うなら、もういい加減私の前に現れて来ないで！」

「……まだ気付いていないのか。これは現実だ」  
怒鳴り口調から一変し、アヤメは淡々と言った。

「何だっつて？」

その言葉に私は思わず尋ねてしまった。

「だからっ、今貴方が読んでいた、その赤茶色の本で描かれている物語の世界は

貴方が今存在している いや、正確には『存在していた』と言う

のかもしれないけど　この世界は同じ世界なのよ」

「つまり、この物語はノンフィクションっていうこと？」

「そつだ」

やっと興奮を抑えて、口調を元に戻したアヤメとは裏腹に、私はその言葉に青ざめる。

今見てる本の『世界』と、この私が存在する『世界』が同じ

『遂に私は発狂してしまった』

追い打ちを掛けるようにアヤメの言葉が耳に入り込んでくる。

「どうしても確かめたいなら、自分自身に聞いて見ればいい」

「えっ？」

「つまり、『我に真実となる証拠を見せよ』と云えばいい。自ずと

答えが見えるだろう」「

出来ることなら、ここから逃げ出したかった。

しかし、ドアの前にアヤメが眼差しを向けているのでもう逃げられそうには無い。

だとすれば。。

この悪夢から逃げ出すには……

「言えは答えが出てくるのね」「  
前に進むしかない！

「ああ」

アヤメが満足そうに答える。

何も起こらずに、無事現実に戻れますように！

翼つばさはそう願いつつ、唱えた。

『我に眞実となる証拠を見せよ』



休憩中。 (2) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

ここから先はしばらくシリアスな展開になります。

もちろん、少しギャグも入れようかな……とも思っているのですが

( ; ^ | ^ A

感想やアドバイスありましたらよろしく願いします。

二人の少女達の記憶 (1) (前書き)

PV2000回突破しました！

読んでいただいた皆様、ありがとうございます。

m ( ) m

今回もよろしくお願いします。

## 二人の少女達の記憶 (1)

『我に真実となる証拠を見せよ』

『キーン』

途端に、頭に締め付けられるような激痛が走る。

「うっ……」

意識が遠退いて行く。

一方で、視界が徐々に暗くなって行く

これで、現実へやっと戻れる……

そのまま、崩れ落ちるように倒れた。

アヤメが呟く。

「しぶといな……」。

いつまで現実逃避しやがるんだ。

しかも、そのまま白眼向いたまま【能力】使って行っちゃったし」

げっ！白眼向いたまま倒れたの私？！

ともかく、それが夢の最後に聞いた言葉に

なるはずだった。普通ならば。

現実が甘くは無かった。

それはまた夢の世界だった。

今度は漆黒の世界に私とまた目の前に人がいる。

前にもこんなシチュエーションあったような……

ちなみに、今度は何故かしら目のピントが何処にも合わせられなく

なつた。

目の前の人物がぼやけて顔どころか、女か男すらかも分からない。分かるのは全体的にそれが水色であると言っただけだ。

いわゆる、『超超ド近眼』の人が普段使っているメガネを外された時の視力に格段に落ちている。

ま、前回の『身体の支配権』を奪われた時よりはまだマシか。今回は『目の支配権』だけで済んでいるし。

今なら、メガネの人の苦悩がよく分かるような気がする。

そんなことを考えていると目の前の人物？が話し掛けて来た。

「今から貴方に現実を見てもらうため、二人の少女達の記憶を貴方に流します」

注意する点は二つ。

一つは、今から見せる映像は

【現実】で起きた出来事に変わりは無いこと。

そしてもう一つは貴方にこの一部始終に手出しすることは不可能です。それがどんな結果になろうとも……

今、私が言えるのはこの二つしかありません」

今さらになって気が付いた。

まだ、この悪夢は続いているんだ……

絶望と共に、気を失う感覚が私に襲い掛かってくる

今日は早めに帰りたいな……。

夕陽の光でオレンジ色に染まる器楽室。

いつも通りフルートを構える。

が、今日は調子が出ない。

蓮華<sup>れんか</sup>が二日間に渡って風邪で休みになっているのが気になってしま  
う。

蓮華はいつも私達の中で一番活発で、熱血な人である。

今まで一年八ヶ月、学校で一緒にいたが彼女は昨日の今までは一度も授業でも、吹奏楽部でも昨日の今まで休んだことは無かった。

『今日もガンガンいくよ!』

その熱血で明るいキャラがいつも私達に元気を与えてくれる。

「蓮花<sup>はるか</sup>」

呼ばれたので慌てて後ろを振り向いた。

「はいつ?!」

「何パニックっているの。」

藤本蓮花<sup>ふじもと はるか</sup>さん

とからかう鈴蘭<sup>すずらん</sup>。

「どうした？調子が悪いの？  
顔がピンクになってるよ」

と一言、  
心配してくれたのは葵だった。

いつもは、花園鈴蘭、森崎葵、佐藤蓮華

後、今はパート練習でいないけど、  
小林真梨奈、木村愛と私の六人で仲良くしている。

「何考え事してるの？」  
ぼけーっとしていたので、すかさず鈴蘭にツッコまれた。  
今日の私は一日中こんな感じだ。

「どうしたの？蓮花」  
そこにパート練習を終えた真梨奈と愛が戻ってきた。

「顔紅いぞ、蓮花」  
ちやっかり黒屋も入ってくる。  
ちなみに黒屋我龍はトランプットパートで全然違うパートの男子だ



が、部長なので、人の輪にすぐ入ってくる明るいわかな男である。

「うん、今日は風邪気味で……」

「じゃあ、今日は無理しない方がいいんじゃない？」と真梨奈。

「私は大丈夫……」「大丈夫じゃない！」

黒屋が割り込む。

「今日は無理するなよ！」

この部長の黒屋我龍様が、顧問に許可もらってくるから、とつとつ  
早退して早く寝ろ。

お前今にもぶっ倒れそうな位体が熱くなっているじゃんか  
と怒鳴られてしまった。

「何でお前が割り込むんだよ！」

鈴蘭を筆頭に皆が黒屋に詰めかけ、ツッコむ。

「だって、「男子が口出しする話じゃないでしょ……」

一言も喋らせない皆に黒屋は追い詰められている。

「少しは俺の話を」「じゃ話に割り込んでくるな！」「」

黒屋が皆にいじめられている一方、  
愛が

「私もあのギザ男じゃないけど、やっぱり今日は休んだ方がいいんじゃない？」と言ってきた。

さすがに皆に心配させてしまったので、やっぱり今日は早退することに決めた。

「本気で一人で大丈夫？」

「うん」

「じゃ気を付けてね！

バイバイ！」

「バイバイ」

愛に見送られて器楽室を出る。

黒屋はまだ鈴蘭達にいじめられていた。

「ま、分かったから「謝れ！」」

校門を出るまで、私はずっと、蓮華と『相沢藍』あいざわあいの心配しか頭に無かった。

途中、誰かとぶつかったが、よく覚えていなかった位私はぼけーっとながら、夕暮れの帰り道を歩く。

「蓮華、大丈夫かなあ……」

「相沢藍ちゃん、今何してるんだろっ……」

早く二人に逢いたかった。

それが不可能だとしても。

二人の少女達の記憶 (1) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

いきなり新キャラいっぱい登場させましたが、あまりにも長すぎるので、詳しい設定が書けませんでした。

すいません(――;) )

後で一人一人詳しく書きたいなと思います。

感想やアドバイスありましたらよろしくお願いします。

二人の少女達の記憶 (2) (前書き)

こんな作品ですが今回もよろしくお願いします。

## 二人の少女達の記憶 (2)

今、私は藤本蓮花ふじもとはすかの目線で商店街の手前まで歩いている。

というよりは強制的に歩かされている。

まただ。

身体の支配権が無い。

「これが『映像を見せられる』っていう訳……」

話を前に戻す。

意識を失った後、再び目を覚ますっていうより、視界が開けるとこんなことになっていた。

『えええっ!!?!?』

窓ガラスの中の『姿』に思わず、声を失った。

ま、元々支配権がなくなっているから意味ないんだけど……

詳しく言つと、

髪はおさげの二つ縛りに、

服は緑のブレザー&緑チエックスカートの白花中はっかちゅうの制服に、

そして完全に違う可愛い顔立ちと手にはフルートが。

簡単にいうと、私が『藤本蓮花』になっている状態。

その姿に思わず惚れてしまう。

ここでまとめ。

つまり、さっきの人が言っていた『映像を流す』というのは、私が『藤本蓮花』になって蓮花が辿る記憶をこの私の身(?)を持って身体ごと体験することを指していたのだ。

何でこんなことを先に言ってくれなかったの!?

こんなにリアルに感じることになるなんて……

いやあ、こんな技術あったら今すぐ特許取って、商売でガツポリ稼げるよね〜

『有名人1日リアル体験!』ってね〜

絶対これなら一瞬でセレブにも……。

でも、今はそついえる余裕が無い。

「ふええ……ふええ……」

今、蓮花さんは風邪気味で顔を茹でタコにさせながら、この白花町商店街を歩いている。

ええ、それはそれは、まるで悲劇のヒロインのようにね……  
可哀想ですよ。

でもね、それは

「（イコール）つまりこの私も同じ目に遭うんだよね……」

「『ふええ……ふええ……』」

何で私がこんな目に遭わなきゃいけないの！

体が熱い。



苦しい……。

何もなんでこんな所までリアルに感じなきゃいけないの……?!

と思っていた次の瞬間。

体に違和感を感じる。

『うんっ?!』

その直後視界が黒一面に染まる。そして私はまた、気を失うことになったのだった……。

悪夢はまだ終わらない。

それは昨日の朝から始まった。

「あら、蓮華<sup>れんか</sup>何か顔が赤くなっているじゃない。  
この温度計で測りなさいよ。」

「えっ、そんなに私、顔赤い？」

朝ご飯のトーストを取ろうとする私に、お母さんは心配そうに言うてきた。

とりあえず一言言って、そのままスルーし、茶色のテーブルのいつもの席に座る。

朝のトーストは焼きたてに冷たいバターを塗るのが、私にとっては一番最強の組み合わせだ。

王道こそが一番である。

朝のトーストに限ってはそう言っても、過言ではない！

と言う訳でバターを取り、鼻歌を歌いながらいつも通りにトーストに塗ろうとした。

お母さんがその私の腕を掴む。

「蓮華、話聞いている？」

「別に大丈夫よ、お母さん」

「じゃなくって、今すぐに測りなさいっ！」

「せめてトーストにバターを塗ってから「先に測って！」」

「トーストは焼きたての熱々のうちにしなきゃいけないの！」

「あんたの顔が熱々だから心配なのよ！」

「むっ」

渋々、私は熱を測ることになった。

「39.8……」

間もなく、お母さんに見つかり私はその日学校を休むことになった。

人生今まで約十五年生きているが、風邪を理由に休んだのは初めてである。

「無遅刻無欠席」

それは蓮華が自慢出来る数少ない記録のうちの一つだった。今その記録も無くなってしまうが。

それと、熱を測る間は温度計を脇に挟まなきゃいけないので、片手しか使えない。

「上手く塗れない〜」

結局、バターはまんべんなくトーストに塗る前に最初に落としたりケ所ですべて溶けてしまい、少し無様になってしまった。

そして、今に至る。

結局、昨日は久し振りにベッドの中で一日中過ごした。

朝からあの『完璧なバタートースト』が食えなかったり、テレビを見ること位しかやる事が無かったので体よりむしろ精神的ストレスが溜った。

白のケータイには、鈴蘭達からのメールが届いた。内容はいずれも私の風邪を心配するメッセージだった。

「ずる休みしただろ

BY 黒屋我龍」

中にはこんなメールをする奴もいたのだが……

『ずる休みする訳ねえだろ、このギザ細目バカ男』とだけ返信して置いた。

「今日から12月か……」今日から冬だと言つのに、今は太陽の陽射しもあり少し暖かく感じる。

熱もだいぶ下がりつつある。

「外に出ようかな……」

お母さんには言わなくても大丈夫だろう。

なるべくお母さんにはバレないように静かに外出の準備を進める。

時計は「12:00」を指していた。

二人の少女達の記憶 (2) (後書き)

今回も最後まで読んでいただきありがとうございました！

感想やアドバイスありましたらよろしくお願いします。

ほんの一言でも歓迎します。

と言っ訳で次回もよろしくお願いします！

二人の少女達の記憶

(3) (前書き)

毎回こんな感じですが、よろしくお願いします。

## 二人の少女達の記憶 (3)

私、蓮見翼はすみつばねは今、絶望の淵にいます!!

って、マジでヤバイ。さつきから頭が狂いそうだ。

さっきのハイテンションな実況風一人言から頭が半狂乱している。

そして、今は佐藤蓮華さとうれんかの体にいる。

ああ、もうダメ、だめ、駄目ダメだめ駄目……

今日で三人目の体である。いくら夢でも、このリアル過ぎるギャップはきつ過ぎる。色んな意味で。

おまけにこの悪夢、まだまだ終わりそうにはない。

小学校時代、集会の校長特有の話の長さを思い出させる。

ああ、早く自分の体に戻りたい戻りたい……

支配権が利かない他人の体の空間で私はホームシックならぬ



命名、【マイボティシツク】状態に陥るのである……

「くっそ〜〜!!」

宿題のA4プリント（数学）を私はやらされていた。

あれから外出の準備は出来たものの、誤算が発生したのだ。

「入るわよ〜」

お母さんが私の部屋に入ってきたのである。  
勿論ノックもせず、いきなり。

急いで荷物を隠して、私服のままベッドに潜った。

「ちょっと熱測ってみなさい」

「ははあ……」

渋々、お母さんから温度計を受け取るうとした瞬間だった。

いきなりお母さんはあるうことかベッドの上を捲ったのである。  
今更、その先を思い出しても後には戻れない。

「36.5……」

しかも運の悪いことに熱が下がっていたことが証明されてしまった。

「……蓮華」

お母さんが薄気味悪い笑顔で言った。

という事で今まで3時間くらいずっとプリントをやらされた。  
部屋の外ではお母さんの監視付きである。

プリントと格闘中、またメールが来る。

『風邪大丈夫？っていつかいつもの蓮華が風邪なんてどうせする休みなんだろ』

By 黒屋

「……………うざっ！」

何でこんなタイミングにつ！！

『だから本気で風邪だったの！今日は外出禁止だから外出出来ないわよ！』

この細目ギザ男！

そして、プリントを終わった今。  
時計は4時を指している。

空はもう水色では無く、夕焼け前の薄い黄色になっている。

そして、私は【脱出作戦】を決行した。

「お母さん、プリント終わったよ。」

「どれどれ……」

テーブルの椅子に座ったままプリントを見るお母さん。

と同時にパジャマを脱ぎ私服姿になる。

そして急いで玄関へとダッシュする。

荷物はもう玄関に置いていた。

「……えええつ、これ駄目じゃない！」

間違いだらけの答案に勿論お母さんは凝視した。

UFOネタよりやっぱり答案の方がお母さんには効く。

そして、玄関ドアを開けて家の外へ脱出したのである。

「作戦成功」

そのまま、しばらくの間お母さんに追い付かれないように夕焼け前の住宅地を疾走した。

息が切れる。

「はあ、はあ……」

そのまま、一回座り込み、上を見上げて見た。

「……………」

思わず目線が合う。

目の前には二階建ての普通の家があり、その二階から発せられる目線に惹き付けられる。

『水色のパジャマ、長い黒髪、虚ろな瞳』  
何だろう。何故か見覚えがあったような……。

「……………」

少女はそのまま私を睨み付けた。

「むっ！」

イラっとしたので、そのまま睨み返してやり、そのままその場を走り去った。

公園のトイレでショートカットの茶かかった髪を直し、白花町商店街を目指した。

商店街は今日から12月と言つこともあり、早速クリスマスソングを流していた。

溢れる人、人、人。

その場にいるだけです。ますます元気が出てくる。

「……蓮華？」

いきなり、後ろから声をかけられた。

二人の少女達の記憶 (3) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

次回からはちゃんと話を進めますので、よろしくお願いします。

m (——) m

二人の少女達の記憶 (4) (前書き)

今回は長めに書きました。

後、最後の展開が少し残酷になりました。  
ま、シリアスな場面なので、何とか今回もよろしくお願いします。



二人の少女達の記憶 (4)

「……………蓮華<sup>れんか</sup>？」

後ろを振り向くと、そこには蓮花<sup>はすか</sup>がいた。  
顔色が少し紅くなっている。

息遣いも少し荒い。……………風邪気味なのだろうか。

「何でこんな早い時間に蓮花がいるの？」

普段ならまだ部活でフルートを吹いているはずなのに。

そんな私の質問に

「……………そう、それはちよつとね、あのう……………そのう……………」  
と、早退したことを隠すようにテンパリながら返す。

「風邪ひいて、早退したんでしょ」

「たつ、確かに、かつ、風邪気味だけど……………それでそつ、早退したなんて！」

更に顔色を紅くさせている。嘘をついている証だ。

「何で隠すの？早退したんなら、私が家まで送ってあげるよ！」

「だから違つって！！……………ただ、私は蓮華が心配であくまでも突き通すその強い口調にたじろく。」

蓮花が何故わざと嘘をついたのかは訳が分からないが、仕方ないので蓮花の言い分を尊重することにした。

「……………分かったよ」

「私もさっきは強く言ってごめんね。」

その後しばらく二人で商店街を歩いていたが、行く宛も無く、沈黙が二人を包み込んだ。

商店街には「ジングルベル」が流れる。

「……………」

蓮花はさっきの一件で深く落ち込んでしまったらしい。

「……………クチヨン！」

蓮花がくしゃみをした。

その姿は脆く、すぐに壊れてしまいそうに見える。

「いいから早くコレ着な」  
無意識に私はこの言葉を反射的に口走り、次の瞬間にはボア付きの黒のロングコートを脱いで蓮花に差し出していた。

「えっ？」

「とにかく早く着ろ。私ならもう大丈夫だから」

そして、蓮花の前に立ち、前から彼女にロングコートを羽織はおらせらせた。

本来はデートで彼氏が彼女にやることである。

ふと我に帰り、自分の行動を恥じる。

「あつ、ああ……えーっと……」

何だか顔が熱くなってきた。

……どうしよ。

「ありがとう。蓮華」

それに関わらず、蓮花は純粹に、私の優しさを受け取ってくれたよ  
うだ。

「あ、……うん。」

逆に私は蓮花の天然キャラに助けられてしまったらしい。

「これからどうする？」

一応念のため蓮花に聞いてみた。

「二人でいるのってもう六年振りになるね」

全く質問の答にはなっていないが、彼女の言っていることは正しかった。

蓮華と蓮花がたった二人きりだけ いや、正確には三人だったが  
で会ったのは、小学二年の頃までで、それから今まで一度も二人  
きりで過ごしたことは無かった。

「どうしたの？ 顔色悪いよ。とりあえず店に入って暖まろう」  
過去の頃を思い出している時にいきなり、蓮花に言われたものだから  
びびっくりしてしまいました。

「……はっ！ごめん、ごめん何か言った？」

「とりあえず店に入る！」

蓮花にそう言われ、私達は店の中へと入っていった。

その店の中は広く、主に本とゲームとぬいぐるみ等の雑貨を扱っていた。

ちゃんと暖房も効いている。

「あつたかい……」

特に、今タンクトップの上に紫いネックのニットとジーパンしか履いていない薄手の服装の私には有り難いものであった。

「あつ蓮華、これ見て！」

蓮花は目を輝かせながら、そこへと私の袖を引っ張りながら連れていった。

きつと身長差が20cm以上もあるせいだろう。  
蓮花が更に幼く見える。  
子供のようだ。

そこには【ぶにすら】のぬいぐるみキーチェーンが置いてあった。

【ぶにすら】とは今人気アニメキャラクターのスライムである。  
具体的に言うと崩れたゼリーに、大きな目がついているような感じに見える。

「じゃあ、蓮花は【ももすら】にする」

「蓮花はピンクかぁー……じゃ、私は赤にしよ」

「お揃いだね」

「そっだね」

あまりにも可笑し過ぎて、

そのまま二人で笑っていたが、急に蓮花の表情が曇る。

「どうした？」

「いやね、もしここに今藍ちゃんがいたら良かったのになと思っていただけ」

「相沢藍あいざわあおい？あの不登校の子？」

「そう、昔遊んでいた子よ」

気のせいか話の空気が重くなってくるような気がした。

「まあ、いいよ。それより早くコレ付けよ」

そこで相沢 藍の話は断ち切られた。

店を出て、早速、普段使っているスクールバックに【ぶにすら】のぬいぐるみを取り付ける。

そこであることに気付く。

「「あっ……」」

六年前、最後に蓮花と遊んだ時にお揃いで買った陶器製のウサギのキーホルダーが無くなっていった。

そのウサギは【夢を叶える御守り】と云われており、その時まだ小2の私達は純粹にそいつに【ずっと仲良しでいたい】という願い事を念じたものである。

「ウサギ、いなくなっちゃった」  
どうやら、蓮花も同じく無くしたようだ。

それほどまでに私達は、【ずっと仲良しでいたい】どころか、六年間の間に溝を深くしていたのかもしれない。



「……………!!」  
いきなり、蓮花が何かに気付き走り始めた。

「蓮花っ! どうしたの!」

「待って!」

私には構わずにどうやら何かを追いかけているらしい。

「何があつたの!」

そんな呼び掛けにも応えずに蓮花は必死に何かを追いかける。

やばい。蓮花との距離が離れていく……

その、次の瞬間だった。

いきなり蓮花は二車線の車道を横切る。

「ドスッ!」

そして、道路の真ん中で転けるようにして倒れ込む。

しかし、蓮花の様子がそこでいきなりおかしくなった。

「……………」

何と其処から一歩も動けなくなってしまっている。

そこにトラックが急スピードで向かって来た。

「キキイイイー！！」

それでもやっぱり蓮花は一歩も動こうとしない。

いや、動けないのだ。蓮花の瞳が恐怖で怯えている。

このままだと死ぬ！

私は蓮花の元へと急いだ。

「蓮花あ！！！！」

蓮花を助ける一心で全力で蓮花へ突っ込み、何とかトラックの外へ  
弾き飛ばした。

代わりに私がトラックの目に出る。

目の前で蓮花が何かを叫んだ。

「  
\*!!」『キキイイイー!!』  
」  
トラックに跳ね飛ばされる。

蓮花……今までごめんね。

そこで私の意識は途絶えた。

二人の少女達の記憶 (4) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。

次回で第一章を終わりにします。

(ああ、これでまた美歌達の活躍が書ける！)

次回もよろしくお願いします。

二人の少女達の記憶 (5) (前書き)

今回も長いですが、是非お付き合い頂けたら幸いです。

二人の少女達の記憶 (5)

……これは本当に現実にあったのだろうか？

生気を失っていく佐藤蓮華さとうれんかの体の中で私はそんなことを考えていた。

トラックに跳ねられたお陰で全身に激痛が走る。

時は既に遅し、彼女の視界はもう何が何であるのかも分からない位ピン트가ぼやけ暗くなっていき、耳はもうほとんど聞こえてくる言葉が無に等しくなっていた。

「……蓮華っ！』とりあえず救急車を』」

泣きじゃくる蓮花はるかの声とやけに冷静なエキストラ（アキバ系の可愛い女の子系）の聲が聞こえてきたのを最後に世界は再び漆黒に支配された。

ああ、やっとこれで悪夢は終わるんだ……

心の中ではとりあえず解放感で満たされていた。

その代わり、色々と気掛かりな事が見えてしまったが……

「まだ終わりでは無いのです！」  
気が付くと、また目の前に（と言ってもピントが合わずよく見えな  
いのだが）水色の人物？が語りかけてきた。

「えっ？終わりじゃないんですか……」

突然の突っ込みに思わずまた幻覚に向かって答えてしまった。

「お忘れになったのですか！」

その人物はソプラノの女性の声で私に厳しい口調で問いただしてく

る。

「貴方は私に『我に真実となる証拠を見せよ』と言いました。

そのために貴方にこの一部始終を見せたのです！

最初に『映像は【現実】で起きた出来事に変わりはない』と注意しておいたのにまだ、貴方は現実逃避をするつもりなのですか？

確かに『終わらせる』ことの方が楽なのかもしれませんが……」

いや、どう見てもこっちが夢の世界でしょ！

と、翼は呆れて突っ込み返そうとした。

「いや、どう見ても』とにかく反論は最後まで見てから言っておさ  
い！』」

水色の人物？は更に続ける。

『では、また今度会いましょう』

また意識が薄れてくる。

「嘘でしょ……！」

それを最後に私はまた『あの世界』へと飛ばされたのだった……



「……蓮華れんかっ！！」

蓮花はずかは今、激しいパニック状態に陥りその場から動くことすら出来なかった。

目の前に蓮華が頭から大量の血を出しながら道路に倒れていた。さっきまで、あんなに元気だった親友が今では、只の動かない人形へと姿を変えている。

「きゃっー！！」

「何だ事故か？」

「ヤベッ！気持ち悪っ！！」「珍しいな」

もう、蓮花の周りには人だかりが出来ていた。そのほとんどが野次馬である。皆、まるでその人形を見るためにや

つてきたのか、まじまじと人形と化した蓮華を見つめていた。中には、ケータイで写真やムービーを撮っている人もいた。

「……………」

暫く、蓮花も放心状態でそれを見つめていたが、それが現実に戻ったことだと認識すると我に帰った。

蓮華が私の身代わりになったんだ……

「……………蓮華っ！」「とりあえず救急車を」「

「へっ？」「

後ろを振り返って見ると、そこには白いワンピースを着た少女がいた。

少女が続けて言った。

「とにかく110番と119番にダイヤルして！」

そう言うと、その少女は蓮華の応急措置を行うのだった。

「血が凄い……止血しなければ」

自ら肩に掛けていた白い布を蓮華の頭に包帯のように巻いている。

蓮花は急いで110番と119番にダイヤルした。

間もなく、救急車と警察が来て私とその少女は蓮華と共に、病院へと向かった。

そして、今は手術室の前の待合室に一人きりで座っている。

「さっきは人だかりの中、応急措置して頂いてありがとうございます」

「いいえ、お礼は要りませんよ。人として当然のことをしただけです」  
少女は明るい口調でそう言うが、先程まで真っ白だったワンピースは所々に血が付き汚れていた。

「いや、貴方が居なかったら、蓮華が生きていることは無かったと思います」

そう言った途端、少女の優しい顔は凍り、いきなり冷たい口調で語り始めた。

「……………本当にそうでしょうか。私が居なくても誰かが助けるのが普通です。なのに、手を差し伸べるところがケータイカメラで撮ったり、見るだけ見て帰ったり……………」  
私が言うのも何なんですが、人間はこの世で一番醜いモノです。そして、呆気なく消えて行くモノ……………」

言葉が胸に突き刺さる。

『呆気なく消えて行く』  
それはまるで蓮華の近い行く末を指しているのかのようだった。

「はっ！ごめんなさい！！つい、人の気持ちも考えずに……………」  
少女は我を取り戻して、蓮花に謝った。

「……いいんです。元は私が悪いのですから」

その時、手術室の自動ドアが開いた。

手術は無事成功したらしい。

しかし、蓮華が取り返しの付かない体になってしまったのも事実であった。

「頭を強く打っている。」

「もしかしたら彼女は一生目を覚まさない『植物人間』になる恐れがあるかと」

そんな医者達の会話をつい耳に入れてしまったのである。

「蓮華あ……ごめん。私が無理して藍ちゃんを追いかけてあげなければ良かったのに」

病室のベッドの上の蓮華は穏やかに寝ていた。

ショートカットで茶髪の優しい顔。

しかし、彼女と話をすることはもう二度と叶うことは無いだろう。

「蓮華あ……もう一度でいいから目を覚まして……私が悪いのよ。  
私が身代わりでいいからお願い」

そう言いながら、ベッドの上の蓮華に泣き付いた時だった。

『その願い、叶えましょう。』

後ろには、さっきの少女が立っていた。しかし、さっきまでとは何かが根本的に違っている。

さっきまでは白いワンピースを着ているだけだった。  
しかし、今の姿は白いワンピースに白い肌、透き通るような白い髪と瞳……

『貴方が良ければ、是非、貴方の願いを叶えましょう。』  
それは救済の女神とも言うべき存在だった。

「本当に叶えてくれるのですか？」

「ええ、貴方が身代わりになつてくれば友は助かります。」

「具体的にはどうするんですか？」

「それは……」

白い少女はその方法を詳しく教えてくれた。そして私はそれを了承した。これからの私の一生と引き換えにして。

「では、いいですね？」

「はい」

月明かりが当たる病室の一室で私は少女から貰った『力』を発動させた。

そして、意識が薄れていった。

「そう、これでいいのよ……」

そう、これでいいの……。



二人の少女達の記憶 (5) (後書き)

これで第一章を終わりにします。  
次回からは第二章です

PV3000回突破しました！  
本当にありがとうございました。

m ( ) m

砂月・SATUKI・

カヴァレリア・ルスティカーナ（前書き）

第二章の始まりです。

今回もよろしく願います。

## カヴァレリア・ルスティカーナ

目を開けると、いつもの自分の部屋に戻っていた。

「はあ……はあ……」

見回してみると、アヤメの姿は見当たらず、あの赤茶色の本『プロローグ』が小さなテーブルにある事を除いては、時間が5分経過しただけの部屋である。

しかし、翼つばね 私自身の体は肉体的にも精神的にも激しい疲労感と嘔吐感に襲われていた。

「……うっ」

口を片手で押さえるが、嘔吐物は胸まで這い上がって来て、益ます々呼吸が苦しくなって来る。急いで私は部屋から出て、階段を降り洗面所へと掛け込む

「うげっ……」

吐いて見たものの、真っ白な洗面所には何も出されてなかった。多分、朝から何も食べてなかったからであろう。とりあえず気分がとても悪かったので、置いてあった白の陶器製のコップで湯き切っ

た口を濯ぎ、潤した。

二階の自分の部屋へ戻り、南の窓ガラスを開けて、おもいつきり太陽に向かって深呼吸をしてみる

「……………すつう……………はああ……………すつう……………はああ……………」

春の陽気のお陰で、幾分かは体を襲ってきた疲労感を取り去ることは出来た。

「……………」  
晴れ渡った青空を見つめてみたが、まだ鬱陶しい気持ちは治まらなかった。

原因は色々であった。

私は確かに 蓮華れんかの体を通じてだが トラックれんかに跳ねられる事故に遭った。

次々と他人の体に無理矢理憑依させられる非現実な出来事の連続でその時は、体の感覚が精神的に麻痺していた。今思うと、自分が車に跳ねられて頭に大出血を受け一度死んだと思うと気分が悪くなる。

ゾンビなど得体の知れない物が出て来るグロい映画よりよっぽどこっちの方がグロテスクな映像である。

しかも、体の感覚が未だに覚えているのだから、更に倍増して来る。

しかし、それよりも気味の悪い出来事が一つ脳裏に有った。

確かに、あの日は、夕方に蓮華に睨まれたのである。

悪夢だと思いたかった。しかし、12/1の夕方、二階のこの部屋で水色のパジャマを着た私自身を睨むリアルな悪夢は存在するのだろうか？

実際、12/1の夕方、多分午後4:30頃、私は窓の誰一人いない外の住宅地の道路を見つめていた。

「……………」  
久しぶりに外の景色を見つめていた私は髪もボサボサのまま、ただ単に虚ろな瞳で道路を見ていた。

「……………はあ……………はあ……………」

突如、そこに黒いボア付きのロングコートを着た茶髪のショートカット女が飛び込んで来たのである。

女は走り疲れていたのだろう、そのまま膝を付いていた。

「……………」  
一体、何から逃げ出していたのだろうか……そんな思いを巡らせながら、視線をそっちに移した。

「！」  
「……………」

気付いた時には、私はそのショートカットの女と視線が逢ってしまった。

もの凄く羨ましかった。

私がほんの一瞬、そう感じた時には、女は私を睨み付け走り去ってしまった。

その女と蓮華が顔立ちから服装何から何までもが全部一致していたのだ。

確かにこれはアヤメの言う通り現実の証明となる。  
もしそうだとしたら、この本の世界も……

「うっ……」

気分が悪くなる。気味が悪かったのだ。もうそれ以上考えたく無かった。

気分を紛らわすため私はいつものお気に入りの曲を掛けた。

「~~~~~」

白一色の小さなCDラジカセがテーブルの上で曲を奏で始めた。

『カヴァレリア・ルスティカーナ』

厳密に言うと、その曲は間奏曲で、卒業式の入場曲に使われる  
厳かなクラシックの名曲だった。

そのメロディーは何処か哀愁を漂わせていたが、私にとっては  
懐かしさを感じる曲だった。

何故かは思い出せないが、昔から聞き慣れていたような気がし  
た。

デジタル時計が丁度12:00を指した。

私は一階へ降り、冷蔵庫の中を物色した。

白く大きな冷蔵庫のくせに入っていたのはたった昨日の残り物の塩野菜炒めと必要最低限の調味料と卵一パック、後は野菜ジュースと牛乳だけだった。

野菜室には色々あったが、冷凍室には冷凍の豚バラ一パックと氷しか入っておらず、すぐ食べられそうなのは、塩味の野菜炒めしかなさそうだ。

この家には、今私しか居ない。母親が二年前、交通事故で亡くなり、父親は一日中外で働いているのだ。

だからと言って、家が貧乏と言う訳ではない。儉約家だった母の意思を父親が受け継いだだけである。

「お母さん、拝借させて頂きます。」

仏壇の前の遺影にそう言い、野菜炒めをレンジで温めてから、



白いコップに注いだ野菜ジュースと共に、自分の部屋へと戻った。

春の陽射しに当たりながら、野菜炒めを頬張った。

「異常なし。旨い」

料理等、家事は殆んど自分担当だった。いつもなら、この後は洗濯などをしなければ行けないのだが、昨日まとめてしたので今日はサボりでも問題は無いだろう。

野菜ジュースを飲み干すと、不意に視線が『プロローグ』へと移った。

「……………」

『カヴァレリア・ルスティカーナ』を聞いていると、あの白い少女が脳裏をよぎった。

そう言えば、あの白い少女は本と悪夢共通して出て来たのである

る。

「……………」

しかし、それだけでは無いような気がした。前にも何処かで遭ったことがあるのかも知れなかったのだ。少なくとも直感がそう訴えていた

悪夢の最後、私は蓮花はすかの瞳を通じて白い少女を見た時、ずっとその顔だけを見ていて、会話など全く聞いていなかった。

「もしかして……………」

そう言ってみたものの、アヤメが出て来る様子は無かった。ま、出て来た所で迷惑なのだが。

このままでは、何も起こらない。

何がどうなっているのかが、分からなかった。

その答を知るには、この本を最後まで読み進めるしかなさそう  
だ

直感的にそう思った私は、再び『プロローグ』の続きを読む決心をした。

この鬱陶しい気持ちを消すために。

『カヴァレリア・ルスティカーナ』の再生が終わった。

## カヴァレリア・ルスティカーナ（後書き）

今度こそ、次回からは美歌達の話になります！

今まで蓄めてた分、コメディをバリバリ書いて行きたいと思います！

（ ）

今後ともよろしくお願いします。

砂月・S A T U K I・

（追記+オマケ）

砂月「魅羽警達の物語は今日で、丁度2ヶ月目になりました！今まで読んで頂いて方々には本当に感謝します！

そして、今後ともよろしくお願いします！

カヴァレリア・ルスティカーナについては検索すれば詳しく分かると思います。本当に良いクラシック曲ですので興味のある方は是非聞いてみて下さい！」

翼「いや、砂月さん、それよりも伝えたいことがあるじゃないですか？」

砂月「……！！何処から出てきたんですか！」

翼「最近ちよつと色々あって自信喪失なんじゃないですか？意見頂

ければ良いですがね……

ま、まず更新もとつくに舞台の12月も超えていますし、早く進めないと」

砂月「うるさいっ！引きこもりが何を言っんですか！」

砂月の必殺技頭突き発動！

翼「ぎゃんっ！」

砂月「と言っ訳で改めて今後ともよろしくお願いします。」

### 第十三話 転入当日の朝の目覚めは（前書き）

今回、久しぶりに美歌達が登場します。という訳でまずはこれを

〜第十二話までのあらすじ〜

「武装した天使」

— armed angelアームドエーゼの美歌は、

「賢明な天使」 ワイスエーゼ wise angelのMariaマリアと共にいつ

も通り日々の任務をこなしていた。

しかし、幽霊こいびの少女おとめの話から「魅羽ミド弩やの噂」を知り、一人になった直後、噂の正体である「白い少女」と接触し失神させられる。

再び目を覚ました時には、既に、人身事故が起こった後で美歌は大きなミスを犯してしまう。

ヴァーギン virginity様の理解とマリアの熱意により、何とかクビの危機からは逃れるものの、今度は一普通の女子中学生（人間）になつて事故の被害者の保護をする羽目になる。

美歌は白花中しらばなでの学校生活を無事過すごせるのだろうか……

波乱の予感……！

今回もよろしくお願いいたします。

### 第十三話 転入当日の朝の目覚めは

2009/12/2(水)、ついに白花中<sup>はっかちゅう</sup>へ転入する日が来た。

「美歌<sup>みか</sup>さんっ！起きて下さい！もう朝デスよ！」

Greg<sup>グレッグ</sup>の使い魔である小さな天使人形、エンが一生懸命に私の頬を揺らして起こそうとしていた。

「ええいつ！「パチッ！」起きて下さい！さもないとお主人様に怒られマス！」

「うっ、うーん……ZZZZ」

「起きて下サイって！」

今度は頬を平手打ちして見るが、体長が10cm程しか無いエンの平手打ちの威力は殆んど0に近かった。

「うん？」



しかし、奇跡的に目を覚ました。

……かのように一瞬見えただけだったのだ。

「起きてくれマシタカ！」大きな藍色の瞳を輝かせ、純白の翼をはためかせながら、エンは半目の私に近づいた。

「……………」

私はエンを睨んでいたらしく、その瞳は猫のようだったという。

「美歌サン……………」

その様子にエンもさすがに首を傾げた。

もしかして……………美歌サンまだ寝呆ねぼけてけている？

既に時は遅かった。

「……………待てグレッグつつつ！！」

グレッグがエンを自分自身に似せて作った容姿のせいだった。

エンの姿を憎きグレッグと寝呆けて見間違えたのだ。

「ヴニャあつ！『バンツ！』」「！！ふぎやあんつ！」

エンはそのまま右のねこパンチ、いや俊敏なライオンパンチの餌食にされるのだった……………

「だつ…………誰か助けてクダサイ！タスケテ…………ッ」

「…………ZZZ…ZZZ…」  
私はその後、右手に悲鳴を上げるエンを握りしめながらゆっくりと再び眠りに就いたということの後から聞かされるのだった…………

誰かさんから聞いた話によると、

その時のアル八姉さんはコタツで発泡酒の缶（350ml）を右手に持ちながら、私はその横で猫みたいに丸まりながらそれぞれ酒の飲み過ぎで爆睡していたらしく辺りにはワイン、焼酎、発泡酒の缶など様々な酒の瓶や缶が散乱していたらしい。

全部で45Lサイズの大きなポリ袋（家庭用）一袋がパンパンになっ  
てしまつような量だったので、片付けるのに一苦労だったらしい。  
そして、今その「誰かさん」がやってくる。

「ヒック……助けてクダサイ……苦シイです……」  
エンは未だに美歌の右手に握りしめられながら悶えていた。  
上半身と翼は動かせるが、腹部を締め付けられ脱出出来無かつたの  
である。

「あら、可哀想に……今助けてあげるからね！」  
そこに白花中の制服に赤をベースに白いフリルが周りに付いたエプ  
ロン姿のMaria<sup>マリア</sup>が駆け付けてきた。

「……?!?!?……マ、マリアサンっ！駆け付けて来たんデスね！」  
マリアの、派手なその格好に泣き顔が一瞬凍り付いたが、エンは今  
は自分の命を重要視し、マリアに感謝を述べた。

「ありがとうございます……！」

「よし、ちょっと待っててね『ええい!!』」

マリアはそう言つと、美歌の右手からエンを無理矢理力で引き剥が  
した。

「うわぁーん！！ありがとございマス！貴方は命の恩人デス！」  
無事救出されると、エンはマリアの胸元に飛び込み抱きついた。

マリアは涙目のエンを両手で優しく包み込み、右の人差し指で頭を撫でやった。「よしよし、良い子、怖かったね……もう大丈夫だからね……」

エンをコタツの上に降ろした後、マリアは怪しい笑みを浮かべた。

「フフフ、朝は目覚めのKissから始まるのよ……」

その頃、私は、すぐ傍に近寄って来る危機もよそに爆睡中だった。  
「ZZZ……ZZZ……」

「フッフ…… Kiss を捧げるわ……これで一層二人の絆も……」

美歌の寝顔にマリアの顔が近づいて来る。

あと10cm………5cm………1cm………！！

『今は自分の命が大切デス………』  
エンはそう心に堅く誓い、今はもう半分心が病んでしまったマリアを見守るしか無かった……

「……………にゃ？」

私はそこで目を覚ました。

今でも、ここで目が覚めたのは正解だったと思う。

「………あつ、みか………起きちゃった？とりあえず、おはよー」  
そういうマリアとの距離は、あと1cmの所である………

もしかして、マリア………？

虫の知らせが鳴る。

体が拒否反応して、反射的に蹴りを行った。

「いやあああ………！！」

その標的は勿論マリアである。

「『バシッ！』 ちょっと待ってっば！いきなり暴力なんて」

右足を両手で止めたマリアは顔を恥ずかしさで赤らめた。

私は全てを悟った。『こいつはド変態だ……』

「……………美歌サンが悪いんデスよ……………」  
コタツの上にあったエンは横目で私にそう言つとプイツと背けてしま  
った。

「えっ？」

勿論、事の一部始終を知らない私はただ首を傾げるだけだった。  
最悪な朝の目覚めである。

### 第十三話 転入当日の朝の目覚めは（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

m ( ) m

おかげさまでPV4000回突破しました！ユニークもいつの間にか1000突破。

本当にありがとうございました！

美歌「本当にありがとうございました。それと」

マリア「私の愛の告白タイム！」

美歌「違っっ！出ていけこのド変態が！」

『バシッ！（飛び蹴り）』

マリア「ぎゃん！（腹部にクリティカル！場外へと飛ばされました）

」

美歌さん、喧嘩は場外でお願いします……

という訳で宣伝。

ヘイト様作の「精霊と契約した少年」はバトル&コメディーな面白い作品です。特にさっきの美歌達のやり取りが好きな方々にはお薦めです！

キャラの人気投票もしているようなので、ご協力頂ける人は是非！

という訳でこれからもよろしくお願いします。

砂月・SATUKI・



**第十四話 朝の食卓で（前書き）**

二月の最後の更新です。

今回もよろしくお願いします。

## 第十四話 朝の食卓で

「はいっ！今日の朝食は和食ね」

目の前には、ご飯に温かい豆腐とわかめの味噌汁、と鮭の塩焼きがちゃんと三人分 私とマリア、アルハリーフ姉さんの分が並べてあり、温かい湯気が立っていた。

「エンちゃんはどいつする？」

こたつの上で、食器と食器の間をピョンピョンと舞うエンにマリアは尋ねる。

その言葉に反応し、お新香の小皿の手前で立ち止まり皿の中を見つめるエン。

「ワタシは人形デスので……」

と言いつつも、その両腕は確実に私の分の白菜のお新香へと伸ばそうとしている。

「こらっ！それ私の分！」

その言葉にエンは膨れっ面の横目で、

「これはさっきの罪に対する罰金の代わりです」  
と応える。

「（ギクッ）……あつ、その時は寝呆けてたんだ、本当にごめんね！」

そうだ、今朝はエンに寝呆けて随分非道いことをしてたっけ。

不敵な微笑みを浮かべて言う。

「……何なら、別に事の一部始終を御主人様に話しマスよ？」

「それってグレッグ様のこと？」

「ハイ！（ニヤリ）」

「……！（ヒイイ！）」

グレッグ  
Gregに知られたら絶対タダでは済まされない。

「それだけは本当に勘弁して！」  
ちゃんと手も付けて謝った。

「じゃあそついうことで」

その一言を言った時のエンの顔は限り無くグレッグと近づいていた

うわあ、本当にエンちゃんが強迫するとグレッグと似てくる。  
これはやはり、グレッグが作った人形だからなのだろうか？

「「シャクシャク」」」

エンは白菜のお新香の一片に噛り付いている。  
その顔はさつきまでとは違い、元の可愛い顔に戻っていた。

それを覗いていた右隣のアル姉さんが言う。

「この子、食べていても問題無いのね……」

「「あっ」

思わずマリアと私でハモってしまった。

さすが、sacred angel<sup>セクレドエンゼ</sup>。どうしたら人間に限り無  
く近い人形を作れるのだろうか……？

「とりあえず、私達もそろそろ  
とマリア。

「うん」

と言いつつも、何の問題無しに、お新香を食べるエンに啞然として  
いる私だった……。

「……？」程なくして、マリアのイメチェンに気付く

「髪、そんな長かったっけ？」

「あ、気づいてくれた？」  
そう言うマリアの髪はいつの間にか肩まであるセミロングに変わっていた。前髪は眉毛が少し隠れるようにカットしているので外国人の人形に見える。

「ふ〜ん……。可愛くなったね」  
と言い、味噌汁を一口また啜る。

久しぶりだなあ……

こんなに平和な朝は久しぶりだ。この前まで世界をあちこち飛び回っていた時は何かと紛争が絶えない地域を見て回っていており、悲惨な所ばかりで仕事をして沢山の「魂」を霊界に送って来たものである。

それに比べ、まだ酔っ払っているのか頬が紅く染まっているアルハ姉さんやハムスターのように白菜を噛り続けるエンと温かい朝食。そして、その朝食を作ったマリアの笑顔に囲まれた朝は気分が良いものである。

「そういえば、その髪どうやって伸ばしたの？」

「あ、それは調合して、特製成長剤を作り、髪に散布したんです」

「それって良いわね。特に中年のおじ様には」

「（……）プツ（そうですね。でもこれを人間界に出すと大変な事になりますね）」

そんな気にも留めない二人の会話をぼんやりと聞いていた私は、  
マリアの顔を見つめていた。

「……薬？」

何となくさつきから「薬」と云う言葉が気になって仕方がない。

……薬？あ、そういえば、こんな感じ、前にもあった気がする……

……

………？

………！？

「マリア……また、「あの薬」を入れたの？」

「あつ、またバレちゃたのね」

「「バレちゃたのね」。じゃないでしょうが……人の食べ物に媚薬  
なんて入れて……！」

「あ、大丈夫よ！美歌の分の味噌汁にしか入れてないから」

こいつ、やっぱりド変態だ！

「アルハさん、二人はいつから、こんな関係なんデスカね？」

「さあ……。私もマリアちゃんと会うのはこれが初めてだから」

二人をじつと観察しているエンとアルハ姉さんの顔には何故か怪しい微笑みが浮かんでいた。

「（果たして、いつからそんなに仲良くなっただか）」「」

さて、この二人は置いといて……。私のマリアに対する怒りは最高潮に達していた。

と言う訳で

「少しは反省しろっ！」

「ちよ、待って「バシッ！」」

私の右ストレートはマリアの顔に入った。

……のはずだったが。

「フッフ、そう簡単には当たらないわよ」

マリアはその一撃を右手で受け止めていたのだ。

依然として笑顔のままである。

それに対し、私の体からは血の気が引いていくのを感じた。

「さあ、どつしどつつか？」

絶体絶命。

その時だ。神の助けが来たのは。

「二人共っ！！もう学校に行かないとご主人様に叱られマスよ！」

「えっ」「

その空気を打ち破ってくれたのはエンだった。

「マジッ！？ちょっと早く制服に着替えなさいよ！美歌！」  
「転じて慌てるマリア。」



「うん、早く支度しなくちゃね」と言いつつ、胸を撫で下ろした。

「エン、ありがとう」

とりあえずエンに礼を言った。

しかし、エンは不自然な笑みを浮かべながら言った。

「本当にいいんですか？」

「えっ？」

「もしも、一秒たりとも遅刻したら二人共、クビになるとご主人様が言っていましたヨ？」

「マジッ!？」

「ハイ 後、5分デスね！」

「……………グレッグっ……………!」

私は、再び、体から血の気が引いていくのを感じたのだった。

## 第十四話 朝の食卓で（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

次回もよろしく願います。

また、何でもいいので何かありましたらコメントよろしく願います。

第十五話 初登校から遅刻の危機（前書き）

今回もよろしくお願いします。

後、読んだ後、何か一言を是非お願いします！

## 第十五話 初登校から遅刻の危機

「あと3分で遅刻デスよ！」

「もう分かってるって！」

はっかちゅうがっこ  
白花中学校の制服に2分で着替えマリアと私は急いで家から出て行った。

『せいぜい、クビにされないよう頑張ってくるのよ！（ニコッ）』  
と、アルハリーフ姉さんから明るくそう言われたのだが、言っている姉さんこそ仕事をサボっていて大丈夫なのだろうか？

マリアが慌てる。

「このままじゃ遅刻するって！」

少なくとも、今はそう言っている暇は無いようだ。アルハ姉より私達の方がクビの危機が迫っているのだから。

とは言うものの、全速力で走ってはいても最低、天霊界から人間界までは片道5分は掛かってしまうだろう……あと3分。その時、私の頭の中にある考えが浮かんだ。

「マリア、体力を強化させる薬は持っている？」

「即効性の注射タイプが一本」

「じゃあそれ打ってくれる？」

「了解！」

ちなみに、今の私達の状態は白花中に向かって落下しているのにも関わらず、更に空気を蹴って落下スピードを上げている状態である。

マリアのような特殊な靴を持っていない私は、マリアが空気を凍結して作った氷を足場として蹴っている。

今のスピードはおよそ80km/時。

落下スピードはどんどん増加していくだろう。

しかし、それでも計算上では時間に間に合わないのである。

「『チクツ』……準備オーケー。」

「二人共！こんなことして……！着地する時どつするつもりなん德斯カ！？無謀過ぎマス！」

いち早く考えを察したエンが私の首元で青ざめているが、頭の中ではちゃんと落下対策も考えている。多少、乱暴な手は使うが、彼ならきつと大丈夫だろう……。

「（美歌の考えている事は分かっているよ）」  
横のマリアもウインクしているので、多分これから私達がすることは大丈夫だろう。

「大丈夫！」

「本当にデスカッ!?」  
やはり、エンは警戒しているな。でも遅刻よりは、きつと大丈夫なはず。

マリアは私の肩に掴まり、右手に薬剤を掛け、前方に掲げる。

「一応、摩擦熱を防ぐため前に氷を作り続けるからね！」

『シユユウツ……』

マリアが手を掲げた先に厚めの氷の膜が出来た。

マリアはそれを片手で押しながら叫んだ。

「美歌！行くよお！」

「うん！」「限界突破発動！」

『ゴゴゴゴゴッ！』

途端に周囲には轟音が響き、10cmもあつた氷の膜は透明なガラスのように紙一重になっていった。

速度は分からないが、この摩擦熱からすると、もしかして音速の域に達しているのかもしれない……

だって、もう既に美歌が走った後には水蒸気が凝結して飛行機雲が出来ているのだから。

「気持ちいいー！」

そういう美歌さんの瞳はもう獣のようになっていて。

「Greg様、もう私には制御不可能ですう……」

獣と化した美歌の首筋でエンは一人そう感じていたのだった。

「あと1分だよ！」

「大丈夫！もうすぐ着くよ！」

目の前には、もう町の景色が見えていた。

「あれが白花中学校？」

エンとマリアが答える。

「「ええ」「」

確かに三階立ての校舎の前の校門には腕時計を見ているグレッグがいた。どうやら、生徒達は殆んど校舎に入っているらしい。

「グレッグに向かって着地！」

「オーケー！」

そんな私達の会話にエンはみるみる青ざめた。

「やっぱりするんデスカ………！」

そんなエンの言葉もお構い無しでグレッグへと突っ込む。

「「行けっ………！」」



これにはちゃんとした理由があった。

このアイデアは単なるグレッグに対しての復讐心から出て来ているのでは無い。勿論、半分はそうなのだが……。

「……………！『ジャキーン！』」

やはり狙い通り、グレッグは透明なシールドを発動させた。

『ヒュウウツ！』

同時に、疾風を全体に向けて発生させ砂埃を起こした。これは多分人の注意を逸らさせるためだろう。

そう、これは大事になることを恐れるセレクドエーゼの気質を利用した作戦である。

これなら、グレッグはきつと大事を恐れ、暴走する私達も抑えてくれるのである。更にはこの緊急事態によって、遅刻どころでは無くなり、今回は見逃してくれるという可能性がある。

と言う訳で。

『……………ズドドーン！！』

思いっきりグレッグの真上に墜落した。  
凄まじい落下音が響く。

「……………よくもこんな方法で、登校して来ましたねえ……………」

そう言うグレッグは見事に私達の下敷きになっていたが、さすが殆んど無傷である。

「……ふうっ、これで間に合っていますよね？」  
私はそんなグレッグに向かって、わざと明るく言い放った。多分、今までの復讐。

ああ、気持ちいい……。

この時の私は颯爽な気分を味わうのだった。

## 第十五話 初登校から遅刻の危機（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

お陰さまで、PV5000回を突破致しました！  
ではこれからもよろしく願います！

第十六話 学校前で口喧嘩する二人（前書き）

お久しぶりです。

更新が遅くなってしまいました。

（ ; ）

今回もあまり進んでいませんが、よろしくお願ひします。

## 第十六話 学校前で口喧嘩する二人

「……ハア、それにしてもよくも乱暴な手段で登校して来たもの  
本当にあの方法でしか登校手段は無かったんですか？全く、ヴァー  
ギン様に許して貰えたからっていい加減にして下さいよ今度は許し  
ませんからね今度は無いと思っていて下さい、それとあんなに速く  
するのとわざわざ私に向かって墜落する必要は本・当・に、有った  
んですか？結構人の失敗を食い止めるのは、体力的にかなり辛いし  
疲れるんですよ本・当・にあんな方法しか無かったんですねそうな  
んですねえ？……」

グレッグは汚されたスーツを直しながら怒りを言葉に含ませて私と  
マリアに皮肉を八つ当たりの如くノンストップで連射している。

マリアが強引に割って入る。

「本・当・にすいませんでした！しかしながら、グレッグ様が少し  
でも遅れることは許されないと」

「私がそう申し上げましたか？」

「ええ、そうでございます」

あれれ？まさか口喧嘩……？

そう感じているうちにも二人の口から発せられる言葉は皮肉を含み

ますます益々凶暴さを増していく。

「申し上げたとしても、わざわざ私に向かって墜落して来るとは」

「でも、グレック様は登校手段については一言・も条件を出していなかったと私は思いますがね？それに先程、仰せられた通り、あれしか方法が無かったんですよそれで良いではないですかなのにそんなに注意されて戴くとは……それだけで身が保たなくなるわ」

「心配して頂く必要は別に無いんですがね……そちらを心配して私は言つたつもりなのですが」

はい、一旦中断っ！全く、何でこんな展開になるんですかあ？……言い合っている二人の方よりも、私、美歌の身体が、聞いている方の身が保たなくなる

……  
だいたい、学校の前で口喧嘩つてもう30分経過しているし、人目に着いたらそれこそ大問題になるって（とはいえ、さすがセクレドエーゼ、人からは見れないように周囲に砂埃を起こし続けている）周りの砂嵐はグレック的能力により発生しているが、こうして二人が凄まじく口喧嘩をしていると二人の気迫で起こされているような

「……………ハア……………」

エンは、ご主人様のスーツの汚れを様々な道具を使い（とはいえ、体長より遥かに大きなブラシ類をポケットから取り出していたが、そんな空間が何処に存在したのだろうか不思議である……。）丁寧

かつ素早く落とすと、そそくさと邪魔にならないよう私の肩に乗る

「美歌サン、喧嘩止めないんデスか？」

「……んなこと、」

今の二人を止めようとしたら餌食になるだけだ。

砂嵐のお陰で、声は聞こえないが二人の瞳が鉛のように淀み、互いに蔑んでいる様子が凄まじい争いであることを肌と感じさせている私には、それをただ見守っていくことしか無かった。

「これってどうすれば良いの？」

取り敢えずエンに聞いてみたが、

「元は美歌サン達が原因なんですカラネ」

現実味のある一言を突っ込まれた

……そりゃそうですよね。

「にしても、早く止めないと学校の方が来チャイマスヨ？ってか、普通美歌サンもそちらにいないとおかしくアリマセンカ？何で此処にいるんデスか？」

「んなこと言われたって、私は、元々する気無かつたし……」

本当は客観的かつ正確に言うと、私はこの喧嘩に入り損ねて、『取り残された』のかもしれないが、命を引き換えにするなら此処にいた方がずっと良い。

にしても、早く終わらないとまずいことになるなあ……。

と、薄々感付いていた時だった。

「……………あ。」

見事にその予感は的中したのだ。

「ヒュウウ……………」ザクツ、

砂嵐に入っていく一つの人影が、中から見えたのである。

「だいたい、貴方はヴァーギン様に会いに行く時も危険を試みず、無断で付いてきたりして……………」

「今とは無関係だと思えますが」

ちなみに今も、二人の口喧嘩は続いている。何故私ではなく、マリアとグレックが口喧嘩になるのかは未だに不明だが。

『ザクツ……………ザクツ……………』

そう感じている間にも、相手の歩がこちらに向かって進んでいく。多分、学校の関係者なのだろう。だとしたらまずいことである。

「風、強いなあ……………」



声が聞こえた時には、既に人影は砂嵐の中に入り、姿が見えるようになっていた。

「おいおい、こんな所で……。」  
テノールの甲高い声で喋る男は、グレックと同じくらい背が高く、（180cm程度）艶のある黒髪を少し長めでワックスを緩く効かせた髪型は、若者のように見える。しかし、目が狐のように細くて、目を開いてるのは分らない。

その方向は、グレックに向かって進んでいるようである。ともかくまずいので、男を止めなくては。

男に駆け寄り、声を掛けてみる。  
「すみませんっ！ちょっと……。」

「ああ、ちょっと君は待ってて」  
男は私の横を擦り抜けていった。

「あ……!!」  
言った時にはもう遅かった。男はグレックに話し掛ける。

「ちょっと、こんな所で何してるのかな？」

その時、まずい。と私は感じた。

しかし、グレックの口からは思いがけない一言が飛び出した。

グレックは口喧嘩をいきなり止め男に笑顔を見せた。「やあ、ゴメン、ゴメン……！」

「……………ムッ。」

マリアはいきなり話を止められたので少し膨れっ面になっていた。

「誰デスか？」

エンはグレックと話をしている男を見つめていた。

その様子から見ると、彼女は彼を知るようではなさそうだ。

「……………じゃあ紹介しなきゃね。」

程無くして、男がこちらを向き、自己紹介を始めた。

「初めまして私はグレックの親友で、香山馨かやまかおると、申します。一応、この白花中学校で数学を教えているけど、君達のこととはグレックから聞いたよ。大変だね。此処で分からないことがあったら僕に聞いてね。じゃあ、よろしく。」

「彼も私と同じくセクレドエーゼである。ま、優しい奴だからな」

セクレドエーゼっすか……。見た目は若く見えるのだが、確かに、アルハリーフ姉さん等よりは真面目に見える。

「それで、早速なんだけど二人はどういう関係にしておくの？」

「えっ………？」

いきなり、そんな質問されても分からないんですけど……？

私が答えを考えていると、すぐにマリアが代わりに答えた。

「じゃ二卵性の双子と言う設定でよろしく願いします！」

「はあ？」

何ですとお！？

ふざけるなあ！その回答！

私がそれを聞いた瞬間に回し蹴りをクリティカルヒットでマリアに命中させたのは言うまでもない。

第十六話 学校前で口喧嘩する二人（後書き）

オマケ+あとがき

砂月「PV6000回突破しました！いつも読んで下さっている方々ありがとうございました！」

マリア「これからもよろしくお願いします！」

美歌「あのさ……」

砂月「はい？」

美歌「物語の舞台って今12月で、翼ちゃんがいる世界も今3月だけど、もうすぐ4月ですよ？遅すぎなんじゃないんですか？」

砂月「（ギクツ……）」

マリア「ま、いいじゃん」

砂月「ま、いいじゃん」

美歌「良くない！」

限界突破発動

美歌「はあああ！！」

ヒーローキックが腹に命中。

砂月・マリア「ギャン！」

登場人物に半殺しにされる作者だった……。

じゃ次回もよろしく願いします！

第十七話 形式上の双子（前書き）

今回もあんま話が進んでいないかと思いますが、よろしくお願いします。

## 第十七話 形式上の双子

「何故に私達は双子という設定で学校に潜入しなくちゃいけないんですか？」

初対面の馨かおるさんに、失礼とも思いつつも納得いかないのので、取り敢えず質問をぶつけてみる。ちなみに今、隣のマリアに話し掛ける訳にはいかない。単に、マリアが私の【回し蹴り】（能力を使った攻撃はこれが最後で今はグレックにより正式に封印されている）を食らって、腹部を押さえているだけでは無い。マリアに話し掛けると、ろくな返事が来た例きたためしが無いからだ。

「まあまあ、美歌さん落ち着いて落ち着いて……。監視役はそうでも無くても、24時間見ていないといけならしいからねえ」

馨さんは優しいが、今はそれが癪さかに障る。

「何故それで【双子】という設定にしなくちゃいけないんですか！」  
大きな怒鳴り声が廊下に響く。今はどこの教室でもホームルーム中ちゆうだったっけ……。自分の行いに反省し、思わず顔を俯すくき声を竦すくめた。  
「そんなに気にしないでいいよ。教室は防音対策がしてあるから」

子をなだめるように言われた。その言葉に更に自分が恥はづれずかしくなる。

馨さんは確かにグレックよりは優しい人だが

「今回、君たちは事件に巻き込まれた二人がいるクラス、2・1に二人そろって転入して貰もらうんだけど、……」

急にそう言くと馨さんは説明を始める。さっきから少し上の方を

向いて話しているが、どうやら人の話を聞かなくなる空想家な所が少しあるようである。

「ほら、二人揃って転入してくるでしょ、確かグレックからは二人は同じ住所の同じ家に住む、というから」

……えっ、何？その同じ設定？

「全く、そんな事は聞いてないんですけど「それでね、」」

私の突っ込みを聞かない馨さん……私の疑問を残しながら説明は続く。

「あ、あの」「それで二人が別々の名字だとね、二人が家に入っていく所が見られたら、色んな噂が立ってまずいからねえ、それで、【双子】と言う設定が一番良いかと思うんだ」

ああ、そうなんだ。確かに納得。      とも頷きつつも、私は諦めずに再度突っ込みを試みる。

「それで何ですか、私は監視役と同じ家に住むなんて「ああ、まだ話は終わっていないよ」「」

「ちよっ、気に」「一応、名字も決まっているらしい。今日から、君達の名字は【蓮田<sup>はすだ</sup>】だってね。」

だから、何その設定？誰が決めた？

「あのだから」「それで形式上、保護者は母は日本人      まあ、名だけ借りてるような物なだけだね。父はグレックとなるんだけどね」

もう、いいや。

馨さんに突っ込むのは不可能と判断した私は、馨さんの話を最後まで聞くことにした。形式上だけだね。



結局、それからの馨さんは全く上の空な感じで話し始めるのだがグレックとは違い誰もが話を聞いていなくても怒ること無く、一人で楽しんでるようだった。確か数学を教えているんだっけ……。やっぱり数学者って、皆こんな所があるようである。

「それでね、勉強はね……」

取り敢えず、ここからの話はカットして形式上だけ聞く事にしておく。イコール、聞かないと言うことなんだけど、ま、グレックと違って怒らないから大丈夫。

二年生の教室は、三階にあるのだが、まだまだ教室までの距離は遠く感じられた。三階までの階段が延々と続いている。

急に、尋ねられたものだから、素っ頓狂な返事をしてしまった。

「美歌サン、マリアさんのこと、忘れていませんか？」

「はい？」

「その様子からすると、どうやら気付いていないようですね」

右肩に乗っているエンに突っ込まれた私は忘れていたな……。と思いつつ、後ろを振り返った。(ついでに言うがこの時私はエンの存在すら忘れていた)

で、そこにいたのは……。

「……どうせ私なんて……」

顔を俯いたまま腹を押さえ歩くマリアの姿だった

何故か、そこらじゅうの空気が負のオーラに包まれているのは気のせいか？

「早く慰めないと、任務どころでは無くなりますよ」 思わぬ事態に啞然としていた私はエンの言葉に頷き、取り敢えず慰めることに

した。

何でこんな事態になった？

「えーっと、さっきはごめんね！……あ、あのう、あの言葉はね」「どうぞ良いんですよ」

「……………」  
彼女の無表情な一言で私は言葉を詰まらせてしまった……。彼女の言う通り、確かにどうでも良いのだが、そんな顔をされると私も心配してしまっじゃないか……。

しかし、マリアに本当に好意を持っているのかと聞かれてしまうと、簡単には「はい」とは言えない関係であるのが今の実態だ。

「……………」  
「……………」

何かこんな雰囲気になってくると、どうしようもなくなる。唯一、馨さんの話し声だけが響いてはいるが……。

いつの間にか、二年生の教室がある三階の廊下に到着していた。

「……………」

もうすぐで2・1だなあ。と、感じていた時。

後ろから、誰かに見つめられている。そんな気がしたが、今は私達以外にここを歩く人なんているのだろうか？

「……………」  
「まあ、いいか」

立ち止まって、振り返ったみたものそこには誰もいなかった。

もしかしたら、自分の罪悪感か違和感から来たものかもしれない。  
。と言っことにすることにした。

形式上なんて、本当はマリアとの関係もそんな関係に過ぎない  
だろうな。そんな考えが脳裏に浮かぶ。

こんなことを考えているなんてちょっと頭が疲れているのかも。

第十七話 形式上の双子（後書き）

ちよつと、美歌の愚痴がたまっているのかも……。

と言つ訳で次回もよろしくお願いします。

第十八話 転校一日目。〈挨拶前編〉（前書き）

遅れてごめんなさい！

今回は久し振りなので、ベタにコメディに書きました。

m ( ) m

短めですスイマセン

第十八話 転校一日目。〈挨拶前編〉

「美歌さん？」

馨さんの呼び掛ける声がしているにも関わらず、暫しの間私はその姿があつたであろう所を見つめていた。

「みーかーサンツ！」

何故だろう、そこには異質な空気が漂っているような気がする。

この空気は前にも一度、感じた日があつた。肩にいるエンに右頬を強く引つ張られても尚、存在を示し続けるその『空間』。怪しさや恐怖、危機ではない『違和感』がそこには感じられる。そうだ、確か『あの時』。白い光を見た時、こんな空気が一日中感じられたような気が……。

「キャツ！」

いきなり肩を捕まれ体が後ろに傾く。宙に浮かぶ感覚の後、背中に腕の感触を感じた。危うく転ぶ所だ。

マリアの凜々しい顔が覗く。

「何ボケッーとしているの」

そう短く言い放つ顔がすぐ目と鼻の先にある。私の体はマリアの小さな腕と体によって支えられていた。

「私なら大丈夫」

セミロングの金髪が私の頬に優しく掛かる。その一瞬大人っぽい表情を見せたかと思うと、途端に元の子供っぽい表情に戻った。

「何、ポケッーとしているのさ？いつつも、美歌ってそういう所あるよね」

「（／＼／＼）あの……」

凄く近距離なんですけど

「ああ、私なら大丈夫よ〜〜 ふふん、美歌ってば私がいないとダメなんだからあ」

おい、さっきの鬱イメージはどこに消えた！

変態キャラ元通り復活のマリアはまた妖しげな笑みを浮かべる。

「ねえ、だからあ」

「もう分かったから離せ」

「やあだ」

「マリアを大人っぽいと思っていた自分が馬鹿だったよ、だから離せ。」

その言葉にマリアは一瞬言葉を詰まらせた

「えっ……」

「何？いい加減離せ」

「……もしかして、美歌っ」

「……？」

マリアの顔が凍り付く。

何かマズイことでも言ったのだろうか？

そう感じたのも、束の間だった

「やっぱり美歌って……………美歌は私の」

「えっ???」

「いっ」

「まさかっ」

何か禁句的な事を私言っちゃったの!?

「好きなのね!」

『チュッ!』

そして、そのままお口にKiss

私の予想は大きくKissによって裏切られるのだった。

……………。

……………!



「……ふざけるなあああ!!」

『ドスッ!』

「ギャァン!!」

その後はいつも通りの展開になっていったのである。

「あの二人っていつもこんな感じなんだね〜」

「お見苦しい所を見せてしまい、スイマセン」

「良いことだ……」

「どこがデスか……?ってか、早くしないといけないのでは?」

「暫し観察したい」

「……………」

困った人達だ……。

目の前に広がる残酷過ぎる光景とそれを楽しそうに見ている馨に、人形であるはずのエンはただ一人呆れるのであった。

第十九話 転校一日目。〈挨拶編〉

取り敢えずマリアにラリアット（相手の首に腕を入れるプロレス技）からの首ホールドを約十秒程絞め続けた所で馨さん達に止められ、やっとのことで教室に入れることになったのだった。

ちなみに馨さんはその時、

「本当はもうちょい二人の様子を観察していたんだけどね……」

と微かに呟いていた。しかし、馨さんはいわゆるそういうキャラでは無い。多分、数学に走り過ぎた結果、人を実験対象に見なしたんだ。と云うより、そうであって欲しい。もうこれ以上、濃いキャラクターはゴメンだ。

2 1は当然の事ながら、二人も転校生が来ることでテンション最高潮の大騒ぎになっていた。

「あの子、ハーフじゃね!？」

「可愛い!」

「ねえ、外国人!？」

「よっしゃ!、一時間目の国語が潰れたあ!」

勿論、噂しているのは皆マリアの事ばかりである。そして、何故

かその話題の中に国語の授業の事が入っているが、多分私達が遅刻したお陰で潰れたのだろう。皆が喜んでしていると為ると、国語の授業はかなりの確率で警戒した方が良いか。

「はいはいっ！皆静かに！」

案の定、先生 これから私達の担任に為るだろうと思われる人の声により、教室全体が静まりかえる。

「2 1担任の村上和也だ。今日からお前達は2 1の一員だ、何も緊張しなくてもいいぞ、気楽にな！」

入口前にて皆に聞かれないように、少し小声で私達に囁いた後、いかにも熱血漢な五分刈りの男は教室へと入って行った。

「少し耳に入れて置きたいことがある」  
後ろには馨さんがいた。

「はい？」  
「今日、佐藤蓮華さとうつれんかが例の事故による大怪我で欠席しているのは勿論のことだけど、藤本蓮花ふじもとはなも、事故のショックによる体調不良で欠席している」

「はあ………と言うことは？」

「今日はクラスの観察及び、人間の体に慣れていくためのリハビリだけ、実質的には自由行動かな」

「やったー！」

「黙れ」

「『バシッ』痛いっ」

当然、変なタイミングで入って来たマリアの額にデコピンの制裁をし、馨さんに話を続けさせた。

「後は何か在りますか？」

「後はね……笑顔を大切にね！」

「笑顔ですね。」

「さらっと言ってているみたいが、実際は楽にしなきゃ難しいよ。僕もこういうのは苦手だったから」

マリアが笑顔を見せる

「こういのですよね」

(ニコッ)

「マリアちゃんはいいね……。可愛いよ」

「じゃ、そういうことで。放課後には、グレッグが家まで案内してくれるそうだから」

そこで話は終わり、教室へ入ることになった。

皆の視線が虫レンズで集めた光のように一点になり痛がゆさを感じる。

先にマリアから入って行き自分から自己紹介を始めた。

「私は、蓮田マリアと申します。皆よろしくお願ひします  
可愛くそう言つと、すぐに頬を染めて後ろへ退いた。」

続けて私の番。

視線に思わず、足取りがぎこちなくなり上手く喋ることが出来なくなりそうである。

「私は、蓮田美歌と申します。マリアの双子の姉ですよろしくお願ひします。」

その後、礼をしたのはいいが、元の姿勢に戻すことが出来ないのである。皆の視線が痛い。

「忘れてるよ、笑顔」

マリアにそう言われ、ぎこちなくもやっと笑顔で元に戻すことが出来たのであった……。

第十九話 転校一日目。〈挨拶編〉（後書き）

今日で執筆5ヶ月目突入しました。

皆さんありがとうございます

m ( ) m

また近いうちに記念おまけを書きたいな……と思ったり。

今日最後まで読んで下さってくれた方々、ありがとうございます。  
また次回もよろしく願います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9215i/>

---

魅羽弩（ミンド）達の物語\_story of prologue.

2011年4月18日07時52分発行